三重県埋蔵文化財調査報告１７５

前田町屋遺跡

第２次調査

― 前田地区・大明神地区 ―

１９９９・３

三重県埋蔵文化財センター

序

前田町屋遺跡は、三重県の中央部の三雲町に所在します。三雲町は、町の中心をはしる参宮街道とともに古くから栄え、古代から中世にかけては神宮領や荘園などが数多く存在した所であります。こうした歴史と関わりの深い三雲町で、平成９年度は５つの遺跡で調査が行われました。周辺のものも含めると、８つの遺跡が調査されました。１年の内にこれだけの遺跡を集中して発掘調査することは極めて希なことであります。これらは、三雲町の歴史や、さらには三重県の歴史を考える上でも大きな成果を挙げることができました。特に、今回調査の行われた前田地区では、第１次調査に引き続き弥生時代から古墳時代にかけての墳墓群が発見され、大きな話題を呼びました。

また、三雲町の御協力のもと「三雲町と低地の遺跡たち」と題した遺跡報告・展示会を開催することができ、多くの人たちにその成果を見て頂くことができました。このように、文化財を通じて多くの方々に歴史に触れて頂けたなら、これに優る喜びはありません。今後、これらの成果をさらに活用していく所存であります。

調査にあったては、地元の方々をはじめ、三雲町教育委員会、および関係各位から多大なる御協力と、暖かい御配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意ある御対応に、心から御礼申し上げます。

１９９９年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　大　井　與　生

例　　言

1　本書は、三重県一志郡三雲町星合地内に所在する前田町屋遺跡の第２次調査の発掘調査報告書である。

2　調査は、平成９年度一般地方道三雲香良洲線香良洲大橋国補橋梁整備工事に伴い、緊急発掘調査を実施したものである。

3　調査は平成９年度に行った。発掘調査は三重県埋蔵文化財センター調査第一課が行い、主査兼第二係長前川嘉宏調整のもと、技師新名強、主事伊藤裕之、研修員城吉基が担当した。

4　当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び資料普及グループ（管理指導課）が行った。遺構・遺物の写真は新名・城が撮影した。執筆及び編集は新名が行った。

5　報告書作成にあたっては、栄原永遠男氏（大阪市立大学教授）・城ヶ谷和広氏（愛知県史編さん室）・高島英之氏（群馬県教育委員会）の御教示を得た。また、二重口縁壺の類例調査では高崎市教育委員会、群馬県埋蔵文化財調査事業団の御協力を得た。ここに深く感謝致します。

6　当地は国土座標第Ⅵ系に属する。挿図の方位は、全て座標北で示している。なお、磁針方位は西偏６°20′（昭和62年）、真北方位は０°18′である。

7　挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真は特に断らない限りは、縮尺不同である。

8　遺構に用いる記号は、以下の通りである。

　　ＳＢ…掘立柱建物　　ＳＤ…溝　　ＳＥ…井戸　　ＳＨ…竪穴住居

　　ＳＫ…土坑　　Pit…ピット・柱穴

9　当報告書での用語は、以下の通り統一した。

　つき……「坏」があるが、「杯」を用いた。

　わん……「椀」「碗」などがあるが、「椀」を用いた。

10　本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

11　調査にあたっては、三雲町教育委員会をはじめ、三重県土木部、久居土木事務所からの御協力を得た。

12　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　言……1
　1　調査の契機……1
　2　調査の経過……1
　3　文化財保護法等にかかる諸通知……1
　4　調査の方法……1
Ⅱ　位置と環境……2
　1　地形的環境……2
　2　周辺の歴史的環境……2
　3　第１次調査の成果……4
Ⅲ　前田地区の調査成果……5
　1　層位と遺構……5
　2　遺物　……17
　3　結語　……38
Ⅳ　大明神地区の調査成果　……43
　1　層位と遺構　……43
　2　遺物　……49
　3　結語　……51

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……2
第２図　周辺地形図……3
前田地区
第３図　調査区位置図……5
第４図　調査区遺構平面図(１)……6
第５図　調査区遺構平面図(２)……7
第６図　調査区西壁土層断面図……8
第７図　調査区東壁土層断面図……9
第８図　ＳＫ12・ＳＫ53平面図、立面図　……10
第９図　墳墓群等高線図　……10
第10図　ＳＤ55南部土器出土状況図　……11
第11図　ＳＤ55・ＳＤ63土器出土状況図　……12
第12図　ＳＤ75平面図、土層断面図　……13
第13図　ＳＫ21・ＳＫ22平面図、立面図　……13
第14図　ＳＥ５・ＳＥ49・ＳＥ58
　　ＳＥ74平面図、断面図　……14
第15図　ＳＫ27・ＳＫ33・ＳＥ49
　　ＳＫ50平面図、断面図　……15
第16～27図　遺物実測図……19～30
第28図　前田・町屋地区遺構平面図　……38
第29図　前田町屋１号墓出土遺物実測図　……39
第30図　二重口縁壺一覧　……40
大明神地区
第31図　調査区位置図　……43
第32図　調査区全体図　……44
第33図　調査区遺構平面図　……45
第34図　調査区土層断面図　……46
第35図　ＳＢ１・ＳＢ２平面図、断面図　……47
第36図　ＳＨ２・ＳＫ１・ＳＥ５平面図、
　　断面図　……48
第37・38図　遺物実測図……50・51

挿表目次

前田地区
第１表　遺構一覧表　……16
第２～８表　遺物観察表　……31～37
大明神地区
第９表　遺構一覧表　……49
第10表　遺物観察表　……52

写真目次

前田地区
遺構写真……53・54
遺物写真……55～57
大明神地区
遺構写真　……58
遺物写真　……59

Ⅰ 前　言

1　調査の契機

前田町屋遺跡（第２次）の調査は、第１次調査に引き続き、一般地方道三雲香良洲線香良洲大橋国補橋梁整備工事に伴う発掘調査である。

第１次調査では、2000㎡を対象に行い、古墳時代から室町時代の遺構・遺物を確認している。

今回の第２次調査では、平成７年度の試掘調査によって得られた結果をもとに、前田地区においては1500㎡を、大明神地区は1250㎡を発掘調査の対象とした。

2　調査の経過

前田町屋遺跡は雲出川堤防に隣接し、周囲には梨園や田畑が広がる。調査区は、前田地区・大明神地区は共に細長く、排土の搬出が困難であるため、調査区を南北に分割して調査を行った。

前田町屋遺跡（第２次）前田地区の発掘調査は平成９年10月６日から重機による掘削を開始し、同年12月16日に終了した。引き続き、翌12月17日より大明神地区の発掘調査を開始し、平成10年２月13日に現地作業を全て完了した。

調査は４ヶ月におよび、寒さの厳しい中での過酷な作業であった。しかし、無事に調査を終了できたのは、ひとえに作業員各位の御尽力によるものである。ここに御芳名を記して、感謝の意を表したい。

熱田　功・熱田仁至・石井哲夫・伊豆川俊江
伊豆川玲子・伊藤　豊・伊藤一美・小川恵美子
小野美代・折川満三・川西敏治・黒瀬敏子
黒瀬　登・後藤正郎・斉藤正一・柴田米子
田中正子・谷井恵子・刀根正次・西村達三
野田幸代・前田のぶ子・松島繁雄・山際ハマ子
渡辺八重子　　（50音順・敬称略）

3　文化財保護法にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等宛に行っている。

・法第57条の３第１項（文化庁長官宛）
　平成９年10月２日付け道建第963号（県知事通知）
・法第98条の２第１項（文化庁長官宛）
　平成９年11月25日付け教文第1743号（県教育長宛）
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長宛）
　平成10年３月17日付け教文第６－97号（県教育長通知）

4　調査の方法

a．掘削の方法について

前田地区では、南半部においては最終遺構面まで重機によって掘削を行い、同面にて遺構検出を行った。北半部においては、多量の遺物が包含された層を確認したため、同面上部にて重機掘削を終了して遺構検出を行った。その後、人力にて包含層を掘削し、最終遺構面にて遺構検出を行った。

大明神地区では、最終遺構面まで重機掘削を行った。

b．遺跡の名称について

当遺跡については、当初前田地区と町屋地区に所在するものを「前田町屋遺跡」、大明神地区のものを「大明神遺跡」と呼称していた。しかし、その後三雲町教育委員会の分布調査により、両者が同一の遺跡範囲に収まることが明らかとなった。そのため、双方とも『前田町屋遺跡』とし、地区名については小字名に従って、第一次調査区を「町屋地区」、第二次調査区を「前田地区」・「大明神地区」と呼称することとした。

Ⅱ　位置と環境

1．地形的環境

前田町屋遺跡の所在する一志郡三雲町星合は三雲町北部に位置し、国道23号線以東の雲出川右岸に広がる地域である。当遺跡周辺は雲出川の自然堤防上に位置しているが、当遺跡の下層は極めて細かい砂質土であり、海岸線に形成された砂堆上であると考えられる。調査区周辺の地形みると、前田・町屋地区と大明神地区がちょうど微高地となっており、両地区の間は低地になっている。さらに大明神地区の隣接地には「曽海」という小字名が残っており、当地周辺は砂堆と海が複雑に入り組む地形であったことが想定される。

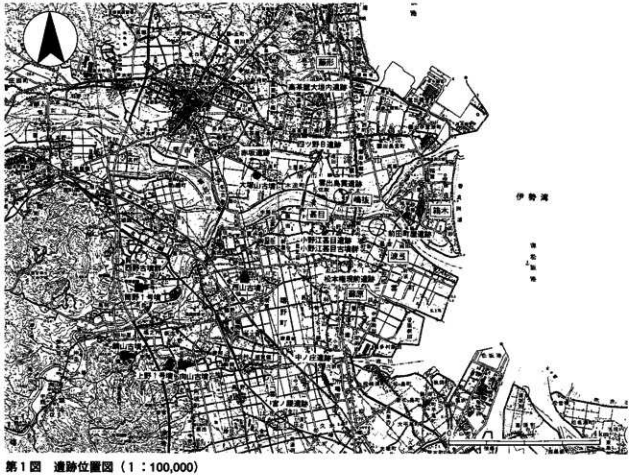
2．周辺の歴史的環境

当遺跡周辺の三雲町北部は概ね雲出川下流右岸に広がる低湿地部にあたる。左岸一帯も同様に低湿地部が広がるが、北西には高茶屋丘陵が存在する。

旧石器時代の遺跡は高茶屋丘陵に所在する四ツ野B遺跡で確認されている。[1] 縄文時代の遺跡は赤坂遺跡で後期の竪穴住居が、[2] 四ツ野B遺跡で晩期の土器棺墓が確認されている。前田町屋遺跡の上流約1kmにある雲出鳥貫遺跡では、晩期の土器棺墓が2基確認され、集落跡の存在も想定されている。[3]

弥生時代の遺跡は、先述の赤坂遺跡において前期から後期の集落跡が展開している。また、四ツ野B遺跡内と考えられる地点からは銅鐸が出土している。一方、三雲町内では中ノ庄遺跡で前期の集落跡が確認されており、[4] 早くから低地部に集落が展開していたことが窺える。

前期古墳について、中村川流域では筒野1号墳や西山1号墳、向山古墳、錆山古墳など前方後方墳が集中する。嬬野町には西野古墳群がある。これらはすべて丘陵地に位置しており、低地部ではほとんど見られない。集落については、先述の雲出鳥貫遺



第1図　遺跡位置図（1：100,000）

第２図　周辺地形図（１：5,000）

跡において前期から後期まで集落が展開する。特に前期においては、竪穴住居跡や墳墓が確認されており、墳墓の周溝からは赤彩された底部穿孔壺も出土している。また、この遺跡では布留式土器が多くみられる他、関東や北陸、山陰などからの搬入土器もあり、雲出川下流域における集落のあり方を考える上で極めて重要である。三雲町西部の宮ノ腰遺跡でも古式土師器が出土しており、[8]この辺りにも前期の集落が存在していた可能性が考えられる。高茶屋丘陵の縁辺部所在する高茶屋大垣内遺跡では、古墳時代中期から後期の大規模な集落が展開する。この遺跡では多くの土器焼成坑が確認されており、[9]『日本書紀』に記載される「伊勢国の蘇形の村」[10]の土師器工人との関連を含めて興味深い。前田町屋遺跡の上流約1kmにある小野江差目遺跡・小野江差目古墳群では2基の円墳が確認されており、ここから円筒埴輪や馬形埴輪が出土している。[11]

古代においては、前田町屋遺跡周辺に「一志駅」が存在していたことが想定される。長治二年(1105)八月に源雅実が伊勢神宮に下向した記録[12]によると、雲出川を渡って一志駅に到着していることや、駅の周辺で度々満ち潮によって通行が困難となっている記事が散見できる。これによると、一志駅は雲出川右岸の海岸部に比定される。また、伊勢神宮に向かうルートについては、鳴抜郷から雲出川を渡り曽原へ向かうルートと、雲出川河口の矢野浦から海上に出るルートが想定されており、[13]当地は陸上交通と海上交通の接点であったと推測される。

中世になると鳴抜御厨や箱木御薗、差目御薗、波弓御厨、蔡原御厨など多くの神宮領が周辺に存在する。塩を納めていた記述がみられるものもあり、沿岸部において盛んに製塩が行われていたことが窺える。

前田町屋遺跡周辺は、雲出川を利用した交通の要衝として古くから栄えたことが推測される。

3．第1次調査の成果

前田町屋遺跡では平成8年度に第1次調査が行われ、古墳時代初頭の墳墓や、中世の井戸や土坑等が確認されている。墳墓の周溝からは、底部穿孔二重口縁壺や朱の付着した石杵などが出土している。

註

(1)村本一弥「津市西ヶ野B遺跡の発掘調査」『三重の古文化』74 三重郷土会　1995

(2)a『久居市史』久居市史編纂委員会　1972

b『平成3年度三重県埋蔵文化財センター年報3』三重県埋蔵文化財センター　1992

(3)伊藤裕偉・川崎志乃『鳴抜　第1次調査』三重県埋蔵文化財センター　1998

(4)谷本鋭二『中ノ庄遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1972

(5)伊藤裕偉『宮ノ腰遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1997

(6)『高茶屋大垣内遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1998

(7)雄略天皇十七年三月二日条

(8)大川勝宏『小野江差目遺跡・小野江差目古墳群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999

(9)『長治二年八月十三日公卿勅使記』『伊勢勅使部類記』(『神道大系』神宮編三)

(10)『香良洲町史』香良洲町教育委員会　1993

(11)『神宮雑例集』・『神鳳鈔』(『群書類従』第一輯)

『外宮神領目録』(『續々群書類従』第一)

Ⅲ　前田地区の調査成果

1　層位と遺構

(1)　層位

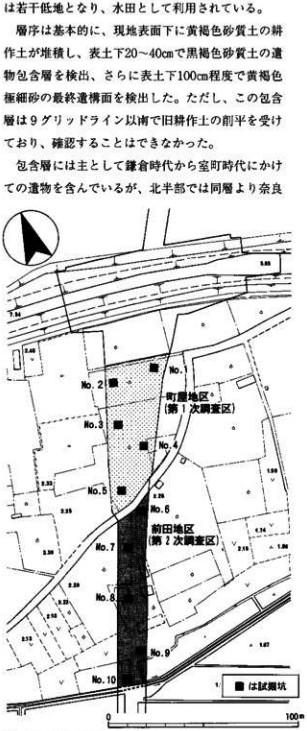
調査区は鎌出川右岸に位置し、標高は約２ｍ程度である。周辺には梨園が広がるが、調査区より南方は若干低地となり、水田として利用されている。

層序は基本的に、現地表面下に黄褐色砂質土の耕作土が堆積し、表土下20～40cmで黒褐色砂質土の遺物包含層を検出、さらに表土下100cm程度で黄褐色極細砂の最終遺構面を検出した。ただし、この包含層は９グリッドライン以南で旧耕作土の削平を受けており、確認することはできなかった。

包含層には主として鎌倉時代から室町時代にかけての遺物を含んでいるが、北半部では同層より奈良時代の土師器等が比較的まとまって出土しており、この包含層はさらに細分することが可能と思われる。しかし、包含層内は極めて均一な色を呈しており、今回の調査では区別することができなかった。

７グリッドライン以南では、最終遺構面が南へ向けて120cm程落ち込み、層序も上記とは若干異なる。現耕作土下には黄褐色砂質土の旧耕作土層が２層存在し、表土下120cm程度で遺物包含層を検出したが、遺物量は極めて少い。包含層下には、ほとんど遺物を包含しない暗褐色砂質土が20～40cm程堆積し、その下より灰白色砂質土の最終遺構面を検出した。

今回の調査区においては、最終遺構面にて弥生時代・古墳時代初頭の遺構を検出し、包含層上面にて鎌倉時代から室町時代の遺構を検出した。ただし、多数の中世遺構を最終遺構面にて確認しているが、これは包含層と中世遺構の埋土が殆ど同色のために包含層上面で確認することができなかったためであり、この時代の生活面は包含層上面と考えられる。また、最終遺構面は海岸の砂のような極めて細かい砂で形成されており、古墳時代初頭以前は海岸に形成された砂堆であったと考えられる。



第３図　調査区位置図（１：2,000）

(2)　遺構

今回の調査では弥生時代・古墳時代・古代・中世の遺構を検出した。ここでは、各時代の主要な遺構について記述する。記載のない遺構については、第１表遺構一覧表を参照されたい。

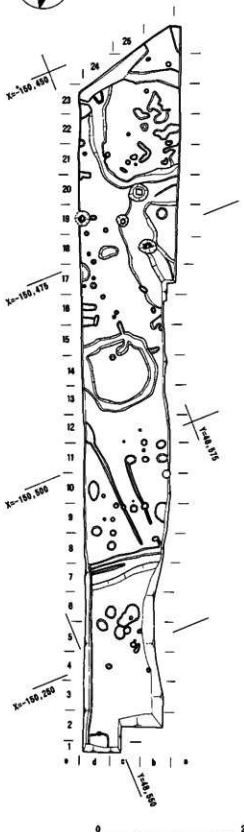
a．弥生時代

弥生時代の遺構は、土坑を２基確認しているが、生活の痕跡を積極的に示すようなものは確認されなかった。

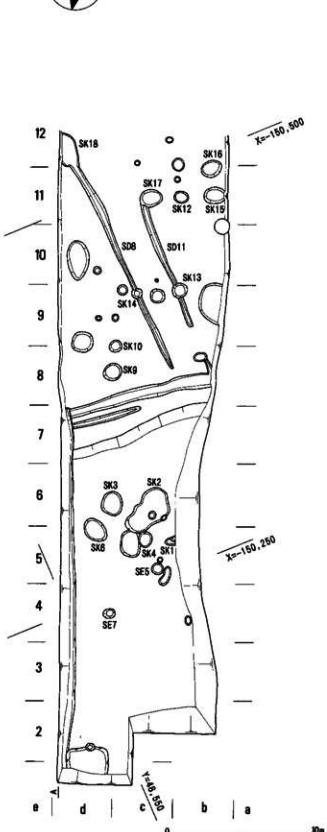
土坑ＳＫ12　長径1.0m、短径0.8m、深さ約0.1mの楕円形の土坑であり、弥生土器蓋付甕が出土した。蓋付甕は転倒した状態で出土したが、この土器は直立した状態で埋納されたものと考えられる。

土坑ＳＫ53長径0.6mの不定形の土坑で、深さは0.25mであった。弥生土器壺が出土している。

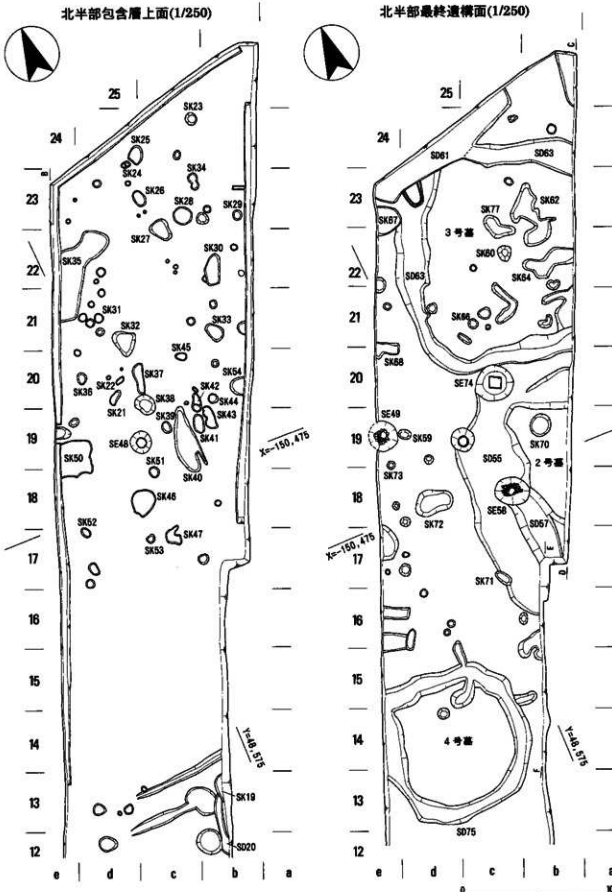
調査区全体図(1/500)



南半部最終遺構面(1/250)

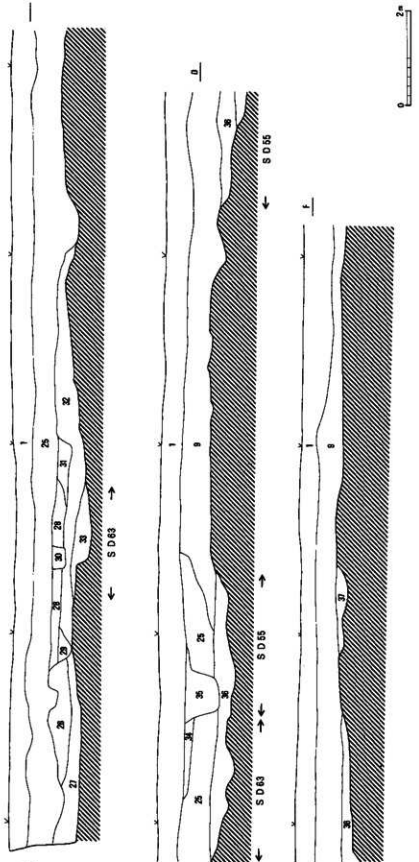


第４図　調査区遺構平面図（１）

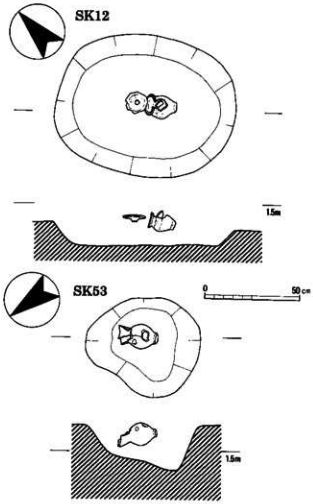


第5図　調査区遺構平面図（2）

第6図　調査区西壁土層断面図（1：80）



第７図　調査区東壁土層断面図（１：80）

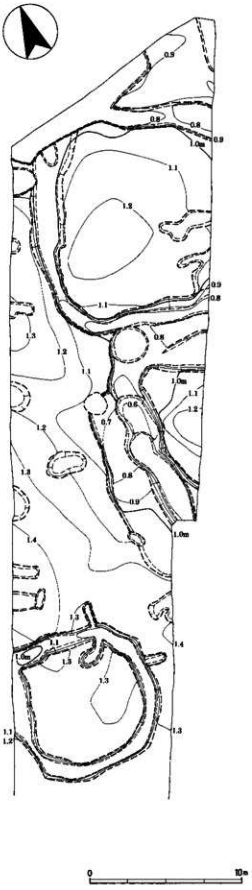


第８図　ＳＫ12・ＳＫ53平面図、立面図（１：20）

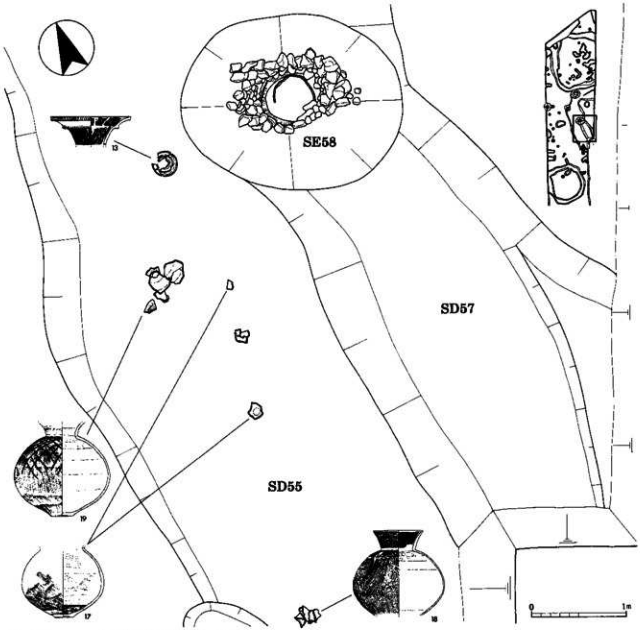
ｂ．古墳時代

古墳時代前期初頭前後の墳墓群[11]を確認した。墳墓は第１次調査でも確認されており、今回発見された３基を含め合計４基となった。検出した順序により前田町屋２～４号墓と呼称する。

２号墓周溝ＳＤ55　幅約３～５ｍ、深さ0.３m程度の溝である。北側が３号墓周溝のＳＤ63と重複するが、埋土が同じであるため切り合い関係については確認できなかった。ただし、底面においてＳＤ63の痕跡は確認することができた。墳墓の主体は調査区外へ展開しており、また一部が後世の遺構の削平を受ける。一辺８ｍ以上の方形になるものと考えられる。遺物は周溝南部において、二重口縁壺(13)や壺(18・19)などがまとまって出土し、北部ではＳＤ63の境近くで完形の底部穿孔二重口縁壺(12)が倒れた状態で出土した。これらは２号墓の墳丘に供献された土器が転落したものか、もしくは周溝内に供献されたと考えられる。



第９図　墳墓群等高線図



第10図　ＳＤ55南部土器出土状況図（１：40）

３号墓周溝ＳＤ63　幅１～２ｍ、深さ0.３mの溝で一部をＳＤ61に切られる。墳形は一辺約12mの方形になるものと思われるが、東部は調査区外に展開する。主体部は確認できなかった。周溝南部の底面から大型の壺(31)が、溝西部から小型の二重口縁壺(20)が出土している。周溝西部で出土した壺(21)内から鉄鏃が出土している。

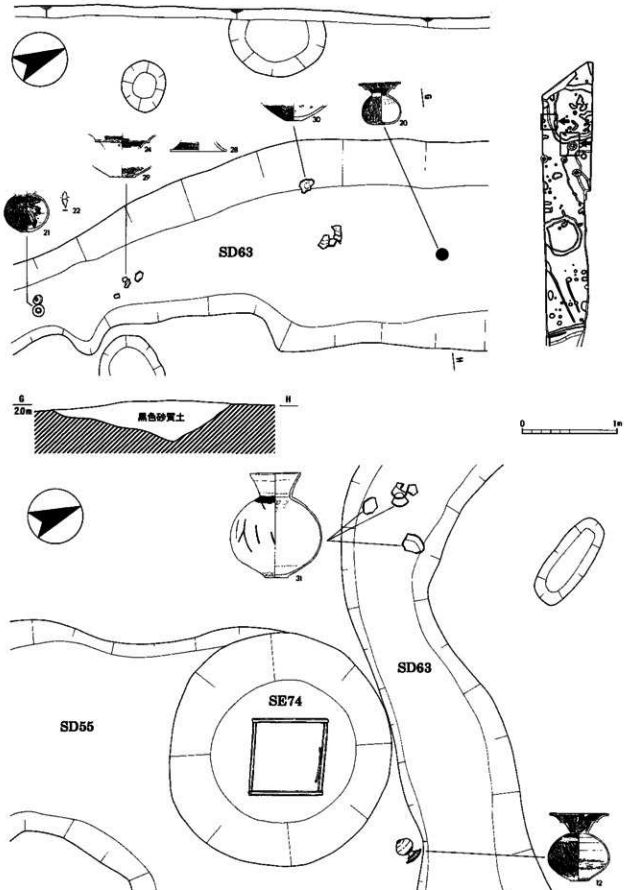
４号墓周溝ＳＤ75　幅0.８m～1.５m、深さ約0.３mを測る。墳形は一辺約８mの方形を呈し、ほぼ調査区内に収まる。主体部は確認できなかった。溝の北西部で円形浮文を持つ壺(32)が出土している。

ｃ．古代

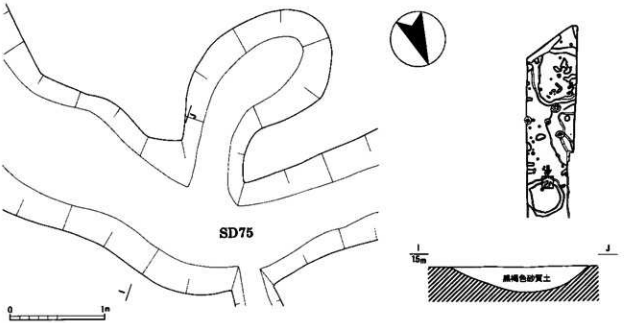
溝ＳＤ61　調査区北端を東西に流れる溝で、東端が北側に屈曲する。出土遺物より、奈良時代後期の遺構と思われる。しかし、底部から古式土師器も出土し、第１次調査ではこの溝に対応するような遺構も確認されていることから、墳墓の周溝が重複している可能性も考えられる。

土坑ＳＫ21　長辺約１ｍ、短辺0.５mの細長い土坑で、深さは0.15m。ここからは、墨書のある須恵器杯身と志摩式製塩土器が一括して出土している。

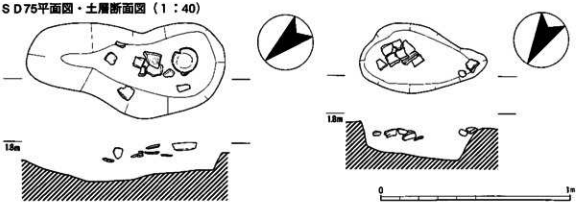
土坑ＳＫ22　ＳＫ21のすぐ北にある土坑で、長辺0.７m、短辺0.45m、深さ0.２mを測る。土師器杯と



第11図　ＳＤ55・ＳＤ63土器出土状況図（１：40）



第12図　ＳＤ75平面図・土層断面図（１：40）



第13図　ＳＫ21・ＳＫ22平面図、立面図（１：40）

志摩式製塩土器が出土している。

土坑ＳＫ79　e13グリッドの調査区西壁奥の包含層より土師器鉢・甕が一括して出土したものである。調査期間の制約により遺構の形状は把握することができなかったが、ほぼ同時期のものが一括して出土したため、遺構が存在するものとして認識した。

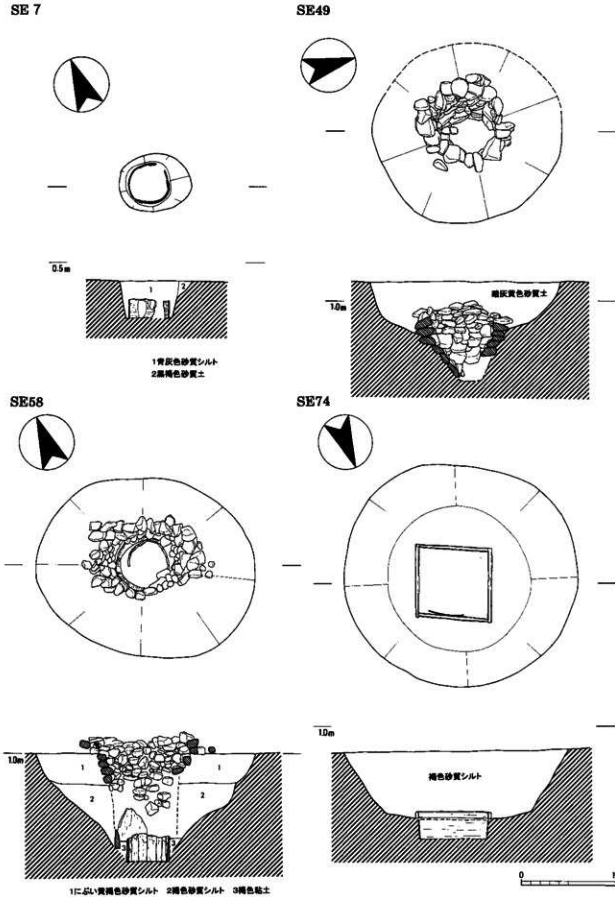
d．中世

井戸ＳＥ５　調査区南端の低地部から検出した遺構である。掘形は直径0.8m、深さ0.4m程度で、底部には直径45cm、高さ20cm程度の曲物が残る。上部遺構は確認できなかった。土師器鍋が出土している。

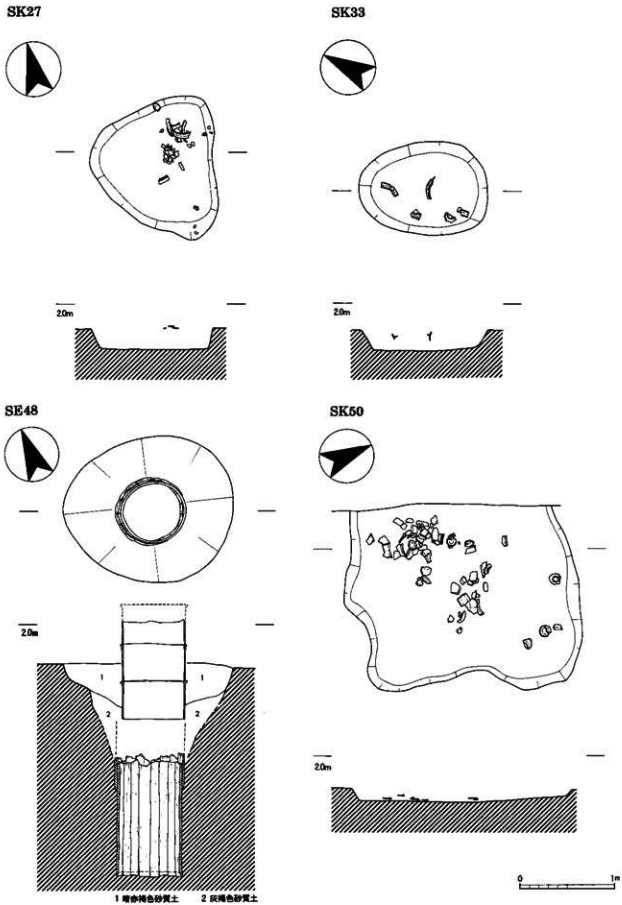
井戸ＳＤ７　低地部にある遺構で、掘形は直径0.6m、深さは0.4m。底面に高さ20cmの曲物が残る。上部遺構は確認できなかった。標高は遺構検出面で0.3m、井戸底部では－0.1m。調査時でも湧水があり、水位は干満の差によって変動する。遺物は出土していないが、ＳＥ５同様中世後期と考えられる。

井戸ＳＥ49　調査区北半西端で検出した遺構である。掘形は、直径2m、深さ1.1mを測り、底部で直径約１mの石組みを確認した。石組みは擂り鉢状にすぼまって終結し、底部に曲物は存在しない。底面は標高約0.2mで、少量の湧水があった。埋土下位より土師器鍋が、埋土上部より土師器鍋や山茶椀、灰釉陶器、白磁などが出土している。

井戸ＳＥ58　２号墓周溝ＳＤ55内で検出された遺構である。掘形は直径2.3m、深さは1.3mである。遺構上部では直径1.3m程度の石組みが確認され、底部では内外二重の木枠が確認された。外枠はやや厚めの木材を使用し、４枚で一周するものと思われるが、今回は１枚を確認したのみである。内枠と違って粗い素材である。内枠は直径45cm程度で長さ30cm、幅10cm、厚さ２cm程度の小さい木材を用いて構



第14図　ＳＥ５・ＳＥ49・ＳＥ58・ＳＥ74平面図、断面図（１：40）



第15図　ＳＫ27・ＳＫ33・ＳＥ48・ＳＫ50平面図、断面図（１：40）

遺構略号	種別	グリッド	検出面	時期	備考
SK1	土坑	c 5	最終面	中世後期	
SK2	土坑	c 5～c 6	最終面	中世前期	
SK3	土坑	d 6	最終面	中世後期	縄掛陶器片あり
SK4	土坑	c 5	最終面	中世後期	
SE5	井戸	c 5	最終面	中世後期？	底部に遺物あり
SK6	土坑	d 5	最終面	中世前期	
SE7	井戸	d 4	最終面	中世後期？	底部に遺物あり
SD8	溝	b 8～d 12	最終面	中世後期	
SK9	土坑	d 8	最終面	中世前期	
SK10	土坑	c 8～d 9	最終面	不明	
SD11	溝	b 9～c 11	最終面	中世前期	
SK12	土坑	b 11	最終面	弥生中期	遺付製出土
SK13	土坑	b 10～c 10	最終面	中世後期	
SK14	土坑	c 9	最終面	中世	
SK15	土坑	b 11	最終面	中世	
SK16	土坑	b 11	最終面	中世	
SK17	土坑	c 11	最終面	中世	
SK18	土坑	d 11～d 12	最終面	中世後期	
SK19	土坑	b 13	最終面	中世	
SD20	溝	b 12～b 13	最終面	中世	
SK21	土坑	d 20	包含層上面	奈良後半～平安前半	志摩式製塩土器と墨書須恵器・砥石出土
SK22	土坑	c 20～d 20	包含層上面	奈良後半～平安前半	志摩式製塩土器出土
SK23	土坑	b 24	包含層上面	中世前期	
SK24	土坑	c 24	包含層上面	奈良～平安	
SK25	土坑	e 24	包含層上面	中世	
SK26	土坑	c 23	包含層上面	中世前期	
SK27	土坑	c 22～c 23	包含層上面	中世後期	青磁椀あり
SK28	土坑	b 23～c 23	包含層上面	中世前期	
SK29	土坑	b 23～c 23	包含層上面	中世前期	
SK30	土坑	b 22	包含層上面	中世後期	
SK31	土坑	d 21	包含層上面	中世	
SK32	土坑	c 19～d 20	包含層上面	中世後期	
SK33	土坑	b 21	包含層上面	中世後期	
SK34	土坑	b 23	包含層上面	中世	
SK35	土坑	d 21～c 23	包含層上面	中世後期	志摩式製塩土器混入
SK36	土坑	d 20	包含層下面	中世後期	
SK37	土坑	c 20	包含層下面	中世	志摩式製塩土器混入
SK38	土坑	c 19～c 20	包含層下面	中世後期	
SK39	土坑	c 19	包含層下面	中世	
SK40	土坑	b 18～c 20	包含層上面	中世前期	志摩式製塩土器混入
SK41	土坑	b 19	包含層上面	中世前期	志摩式製塩土器混入
SK42	土坑	b 20	包含層上面	中世	
SK43	土坑	b 19～b 20	包含層下面	中世	
SK44	土坑	b 20	包含層上面	中世	
SK45	土坑	b 20～c 20	包含層上面	中世後期	
SK46	土坑	e 18	包含層下面	不明	
SK47	土坑	c 17～c 18	包含層上面	中世前期	
SE48	井戸	e 19	包含層下面	近世以降	瓦質陶器井戸枠3段あり、18世紀以降
SE49	井戸	e 19	最終面	中世後期	白磁椀・灰釉陶器あり、石組みあり
SK50	土坑	d 18～d 19	包含層上面	中世	瓦器椀あり
SK51	土坑	c 18	包含層上面	中世	
SK52	土坑	d 17～d 18	包含層上面	中世	志摩式製塩土器混入
SK53	土坑	c 17	包含層上面	弥生後期	
SK54	土坑	b 20	包含層下面	中世後期	
SD55	溝跡	b 16～c 21	最終面	古墳初頭前後	2号墳周溝、底部穿孔一重口縁壺
SD57	溝	b 17～b 18	最終面	中世前期？	加工円盤出土、SE58に接続
SE58	井戸	b 18～c 18	最終面	中世前期	石組み、二重の井戸枠あり
SK59	土坑	d 19	最終面	中世	
SK60	土坑	b 22	最終面	中世	
SD61	溝	d 23～b 25	最終面	奈良	墳墓の周溝の可能性あり、墨書土器あり
SK62	土坑	b 22～b 23	最終面	不明	
SD63	周溝	b 20～d 23	最終面	古墳初頭前後	3号墳周溝、二重口縁壺・鉄鏃あり
SK64	土坑	b 22	最終面	不明	
SD65					SD63と同じため抹消
SK66	土坑	c 21	最終面	不明	
SK67	土坑	d 22～d 23	最終面	不明	
SK68	土坑	d 20～d 21	最終面	不明	
SK70	土坑	b 19～b 20	最終面	中世	
SK71	土坑	b 15	最終面	不明	
SK72	土坑	c 18～d 18	最終面	中世前期	
SK73	土坑	d 19	最終面	中世	
SE74	井戸	b 20～c 20	最終面	中世後期～近世	井戸枠・遺物あり
SD75	周溝	b 13～d 15	最終面	古墳初頭前後	4号墳周溝
SD76					SD75と同じため抹消
SK77	土坑	b 22～c 23	最終面	中世	
SK79	土坑	e 13	包含層内	奈良	西駅包含層内から土器が一括出土

第1表　前田地区遺構一覧表

成される。遺物は掘形より土師器鍋や山茶椀など13世紀前半の遺物が、埋土より山茶椀など13世紀後半の遺物が出土している。従ってこの井戸は13世紀前半に造られ、13世紀後半には廃絶したものであろう。

溝ＳＤ８　調査区南半を斜行する溝で、幅0.３～0.５m、深さ0.２mを測る。土師器高杯・鍋、山茶椀、砥石などが出土している。

溝ＳＤ11　ＳＤ８の北側を平行にはしる溝で、幅約0.５m、深さ0.１mを測る。土師器鍋や山茶椀が出土している。ＳＤ８と同時期の可能性が考えられる。

溝ＳＤ57　ＳＤ55内から検出された遺構で、幅２m、深さ0.４m。ＳＥ58に接続し、この井戸の水を利用する施設であると考えられる。遺物は時期が確定できないが、ＳＥ58と同時期の遺構であろう。

土坑ＳＫ２　低地部の遺構で、長辺４m、短辺２m、深さ0.２mの不定形をなす。山茶椀などが出土。

土坑ＳＫ３　低地部の遺構で、直径1.４m、深さ0.４mの楕円形を呈する。土師器鍋や緑釉陶器、山茶椀、常滑産の甕などが出土している。

土坑ＳＫ４　直径0.８m、深さ0.２mで円形を呈する。土師器皿・鍋や山茶椀などが出土。

土坑ＳＫ６　長辺1.５m、短辺1.２mの不定形を呈する。深さは0.２m。土師器皿や山茶椀などが出土。

土坑ＳＫ27　径1.５m～1.３m、深さ0.２mの不定形を呈する。土師器鍋や山茶椀、青磁などが出土。

土坑ＳＫ30　長径2.１m、短径1m、深さ0.３mを測る。土師器鍋や山茶椀、瀬戸産の椀などが出土。

土坑ＳＫ33　長径1.４m、短径0.９m、深さ0.２mを測る。土師器鍋や山茶椀が出土している。

土坑ＳＫ35　不定形を呈する遺構で、深さは0.１mと浅い。土師器椀・鍋、山茶椀などが出土。

土坑ＳＫ40　長径4.６m、短径1.６m、深さ0.３mで不定形を呈する。土師器鍋と山茶椀が出土。

土坑ＳＫ50　一辺約２mの方形を呈する。深さは0.１mと浅い。土師器甕や山茶椀が一括して出土。

土坑ＳＫ54　直径1.２m、深さ0.２mの楕円形を呈する。土師器皿・鍋が出土。

土坑ＳＫ60　長径1m、短径0.９m、深さ0.３mの楕円形を呈する。底部が欠損した土師器鍋が出土。

土坑ＳＫ68　長径1.５m、短径1.１m、深さ0.３mの不定形を呈する。土師器甑などが出土。

e　近世以降

井戸ＳＥ74　ＳＤ55内より検出された遺構である。掘形は、直径２m、深さ１mを測り、底部には長さ80cm程度の木材を組み合わせた方形の井戸枠が確認された。その下には曲物の一部が僅かながら残る。山茶椀や近世初頭になるような陶器が出土しおり、中世後期～近世初頭の可能性が考えられる。

井戸ＳＥ48　掘形は直径2.３m、深さは検出面より2.３mを測る。上部には常滑産の陶製井戸枠が３段積まれる。下部には上下２段の結桶があったものと考えられるが、上段は僅かしか残っていなかった。下段は長さ120cm程度の木材を用いており、18枚で１周する。底部は標高－0.７mに達し、かなりの湧水があった。このような井戸は津市から松阪市の地域で数基確認されいるもので、18世紀以降のもの。

２　遺物

縄文時代後期から近世までのものが出土しているが、主に中世の遺物が多い。以下、主要な資料について遺構別に記述するが、他のものについては第２～８表の遺物観察表を参照されたい。

(1)縄文時代

包含層出土土器(137)　壺の一部と思われる。表面には数条の沈線がみられる。後期のものか。

(2)弥生時代

土坑ＳＫ12出土土器(１・２)　１は壺で、外面を工具によるナデ調整が行われ、端部にはハケ調整が行われる。２は甕である。１は外面および内面口縁端部に、２は外面全体に煤が付着しており、ともに使用した痕跡がみられる。中期後葉に相当する。

土坑ＳＫ53出土土器(３)　外面及び口縁部内面にはハケがみられるが、口縁端部は内外面ともに強いナデ調整が行われる。体部下半には焼成後に大きく穿孔されている。後期前葉のもの。

包含層出土土器(138)　甕の口縁部で、端部には刻みがみられる。中期中葉のもの。

(3)古墳時代

周溝ＳＤ55出土土器(４～19)　４～６は小型器台。６は杯中央部の器壁下に窪みがみられる。これは、脚部に粘土を充填した際のものと考えられ、線

みは後の成形によって塞がれる。[20] 8～13は二重口縁壺。8は内外面ともに赤彩され、口縁端部と有段部外面に刺突文が施される。9は赤彩されないが、8と同様の調整がみられる。11は有段部から口縁部にかけてまっすぐ上に伸びるもので、他の二重口縁壺とは様相を異にする。胎土・調整ともやや粗く、搬入品の可能性も考えられる。12は完形で出土したもので、底部に焼成後の穿孔がみられる。調整は全面に丁寧なヘラミガキがみられる。口縁端部外面には「×」状の刺突文が、有段部外面には斜線列の刺突文が施される。肩部上端には縦方向のハケ調整が行われた後に、2条の櫛描文を施し、区画内には綾杉状の刺突文が施される。体部外面のヘラミガキは櫛描文を施した後に行われている。13は大型のもので口縁端部と口縁部外面に斜線列の刺突文が施される。頸部外面はミガキ調整前に縦方向に強いナデ調整が行われているため、幅約1.5cm毎の面をもつ。14は内外面ともヘラミガキがみられるものであるが、器形は不明である。古式土師器ではない可能性もある。15・16は壺の底部で、焼成後に穿孔が行われている。17～19も壺である。18は単口縁の壺で、丁寧なヘラミガキがみえる。肩部にはハケ調整を行った後に、櫛描文が1条巡る。胎土・調整とも12とよく似ている。19は口縁部が意図的に打ち欠かれたものである。肩部でハケメが羽状に交差しており、S字状口縁台付甕と同様の手法がみられる。体部外面には籠状のもので覆われていた痕跡が残る。これらは概ね元屋敷式[11]に併行するものである。

周溝ＳＤ63出土遺物(20～31)　20は小型の二重口縁壺で、体部は下膨れの形態を示し、底部は直径2.8㎝程の円形に押し上げられる。口縁端部外面には微かに「×」状の刺突文がみられる。21は壺の体部であるが、頸部以上は欠損している。外面は丁寧なナデ調整が行われる。22は、21中の下部埋土内から出土した鉄鏃で、壺が周溝の底面から正位の状態で出土していることから、鉄鏃は壺内に納められていたものと思われる。24は二重口縁壺の有段部。斜線列の刺突文が巡る。25は弥生後期の高杯で混入品。28は高杯の脚部で櫛描文と刺突文が巡る。29・30は壺の底部。29は焼成後穿孔が行われる。31は単口縁の壺である。体部上端にはハケ調整が行われ、体部外面には籠状のものに覆われた痕跡が残る。これらは概ね元屋敷式併行期のものである。

周溝ＳＤ75出土土器(32)　やや下膨れの体部をもつ広口壺。体部上位には刺突文と櫛描文が巡る。11縁部内面には3つの円形浮文がみられる。欠山式中～新段階併行期のものと考えられる。

包含層出土鉄製品(252)　馬具で、轡の引手の部分である。屈曲する共造りの引手壺と遊環をもつ。5世紀後半から6世紀前半に相当する。

(4)古代

土坑ＳＫ21出土遺物(33～36)　33は須恵器杯身。底部はヘラケズリがなされるが、体部との境でナデが一周する。側面には「乙」状の墨書がみられる。34は土師器。内外面ともハケ調整が行われるが、器種はよくわからない。35・36は志摩式製塩土器で、器壁はやや厚く、作りは粗い。須恵器は奈良時代中期から後期、製塩土器は平安初期頃のもの[9]と考えられ、若干時期は合わないが一括して出土している。

土坑ＳＫ22出土遺物(37・38)　38は志摩式製塩土器である。ＳＫ21と同様の時期のものであろう。

溝ＳＤ61出土土器(39～49)　45は底部に墨書がある。包含層出土のものにも同一筆者のものと思われる墨書がある。奈良時代前半のもの。34は土師器皿体部下半にはケズリがみられる。これらは概ね奈良時代のものである。44・46はともに混入品。

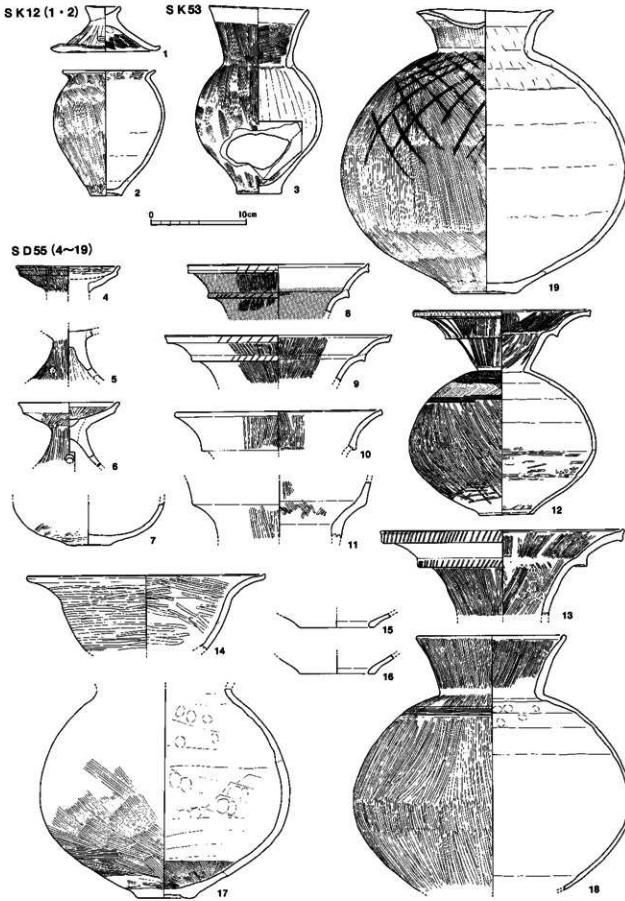
土坑ＳＫ59出土土器(50～54)　52・53は土師器杯。口縁端部内面に沈線が巡る。51は底部に墨書がみられる。これらは奈良時代のものである。

土坑ＳＫ79出土土器(267～272)　267は土師器の大型鉢。内面には煤が付着し、蓋として使用したような痕跡も窺える。268～272は土師器甕で、270～272は長胴になる。奈良時代の良好な一括資料である。

包含層出土土器(147～203)　147・148は飛鳥時代の土師器椀。151～174は奈良時代のもの。175～178は土師器皿で、平安時代前半に収まる。189～193は志摩式製塩土器。包含層からは図化できない小片のものも含め、約180点の製塩土器が出土している。

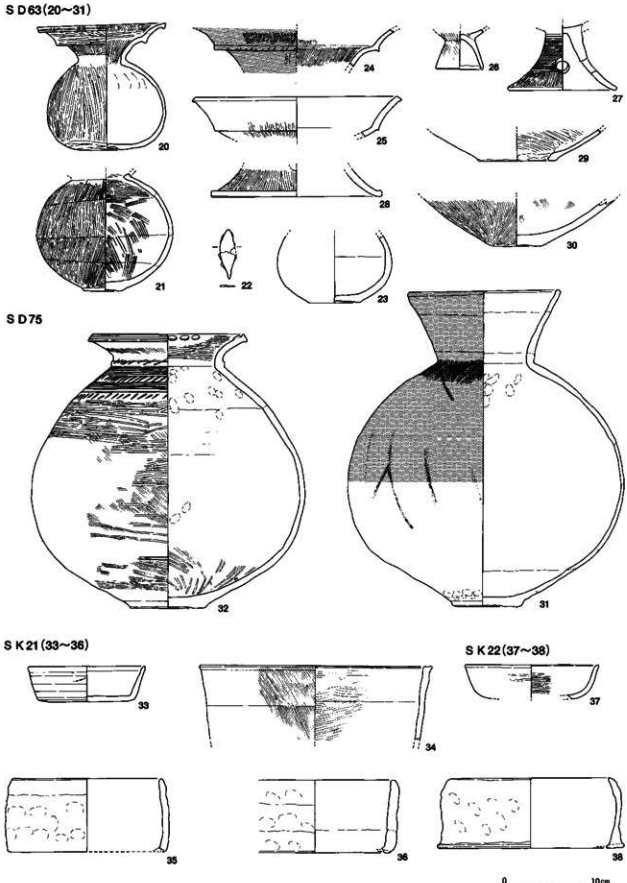
(5)中世

井戸ＳＥ49出土土器(55～61)　55は瀬戸産の椀。内面にはトチン痕が残る。59～60は土師器鍋で58・59は伊藤編年[20]第3段階、60は第4段階に相当する。



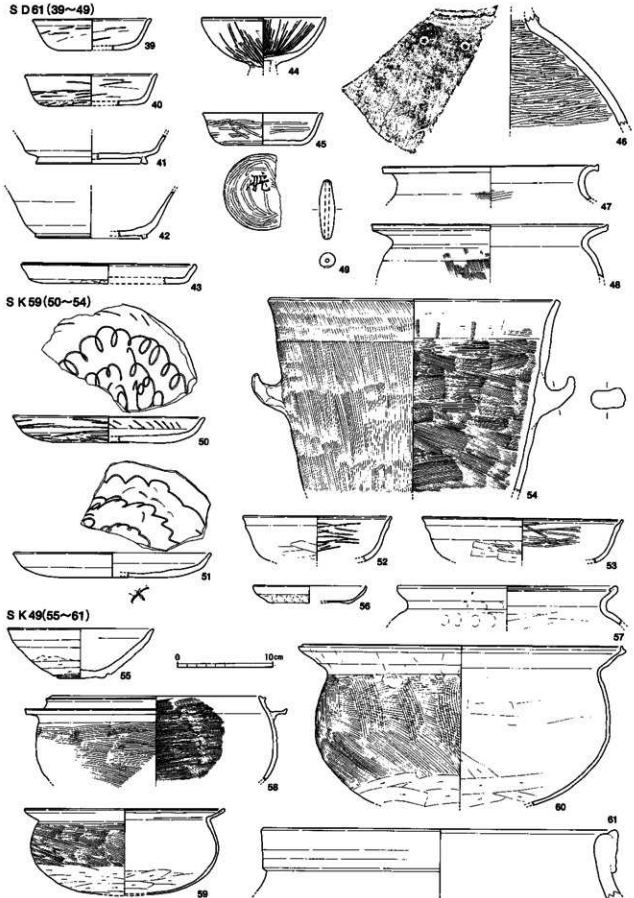
第16図　遺物実測図（1：4）

※トーンの部分は赤彩

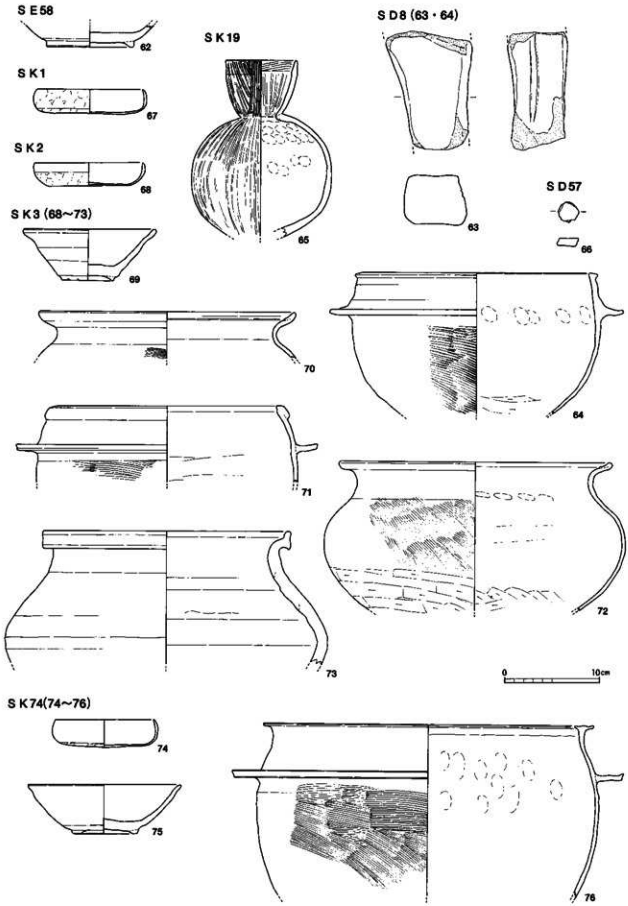


第17図　遺物実測図

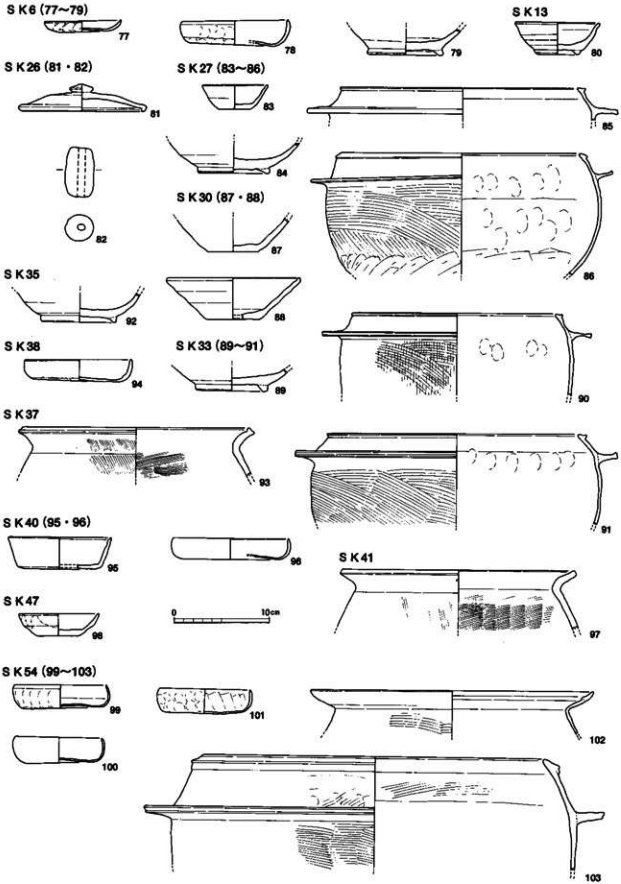
※トーンの部分は赤彩



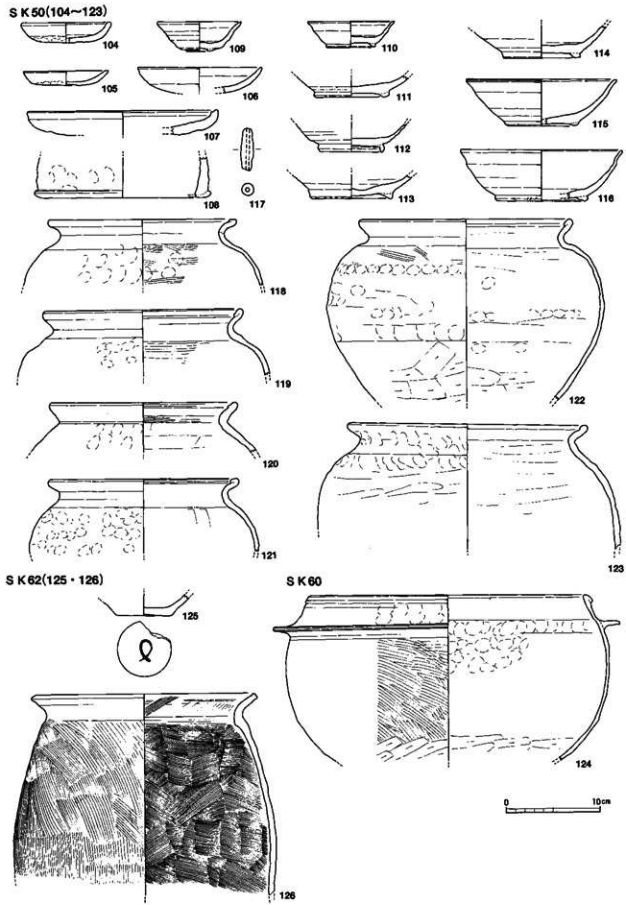
第18図　遺物実測図（1：4）



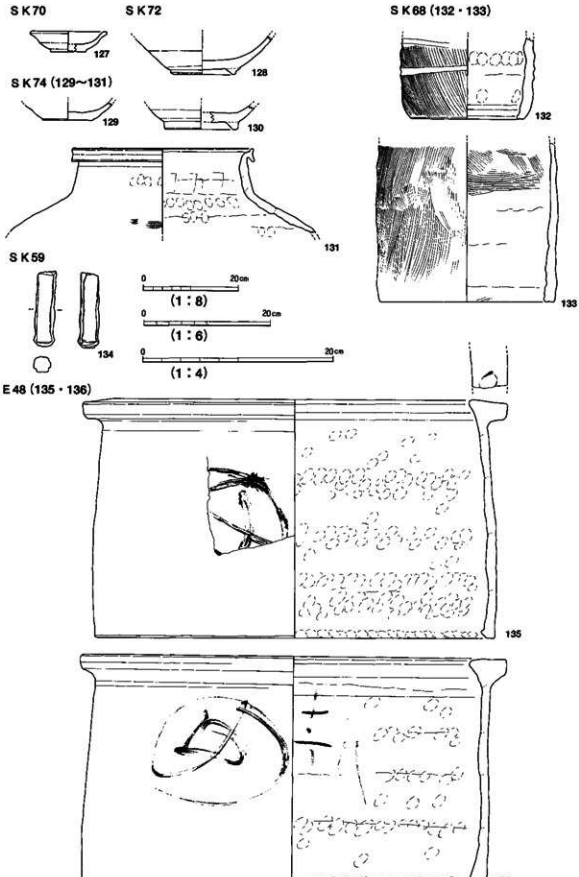
第19図　遺物実測図（1：4）



第20図　遺物実測図（1：4）

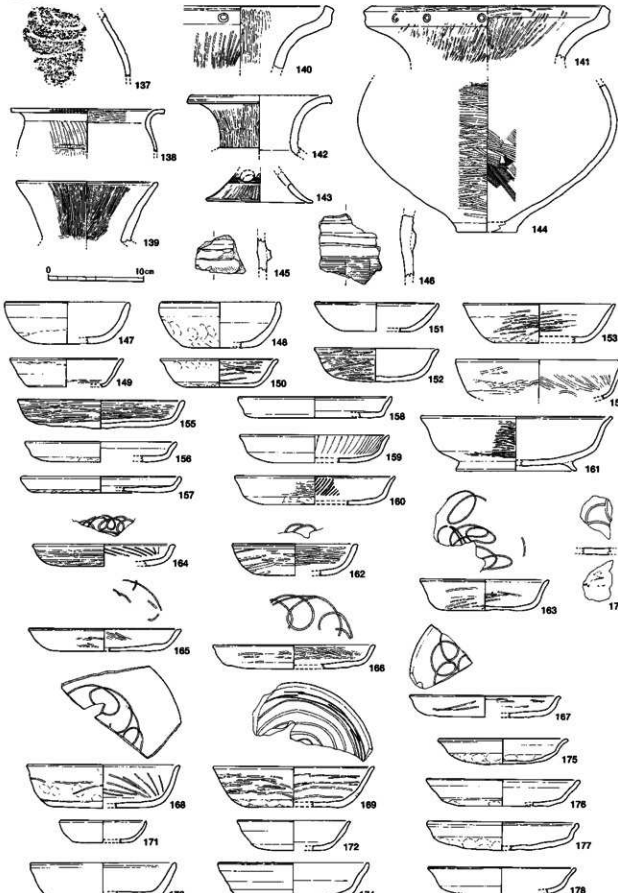


第21図　遺物実測図（1：4）



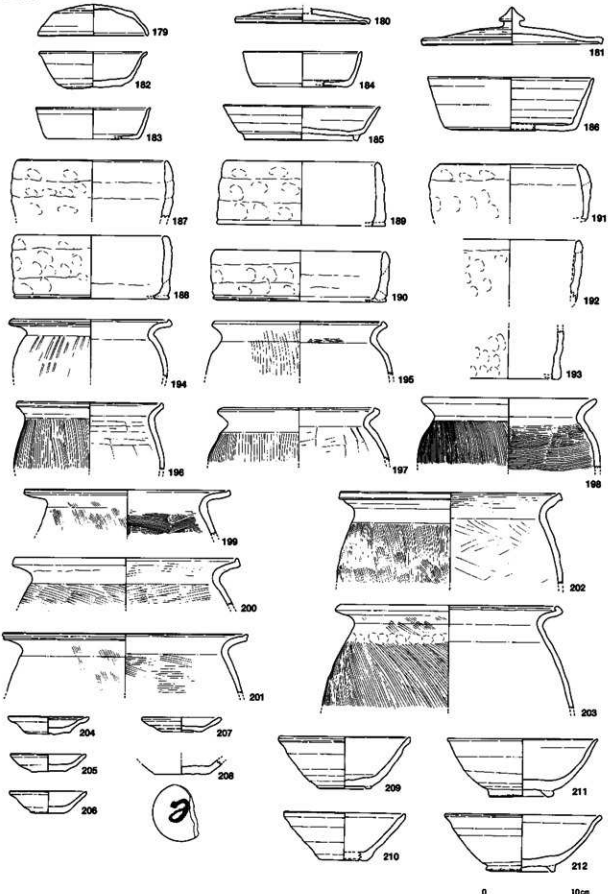
第22図　遺物実測図（1：4）

包含層



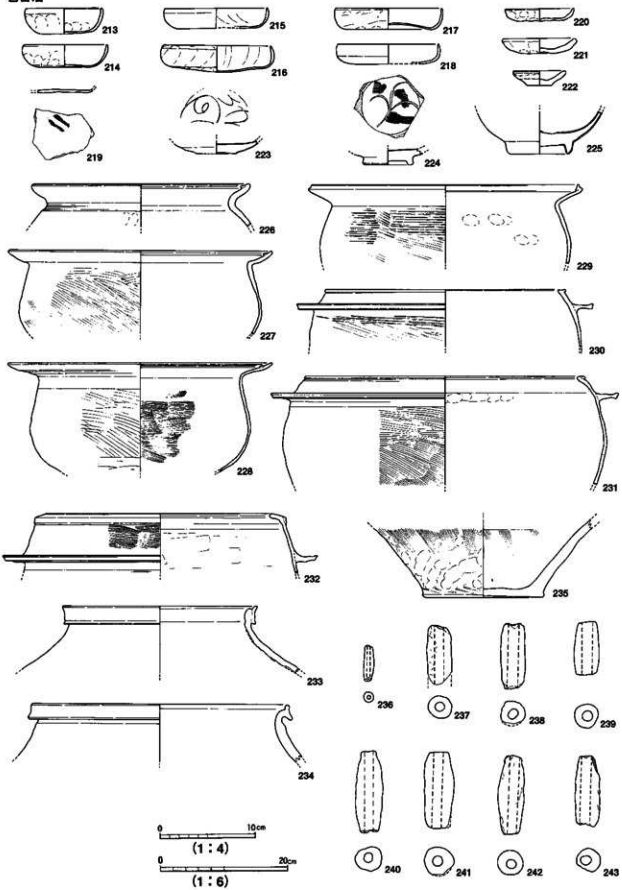
第23図　遺物実測図（1：4）

包含層



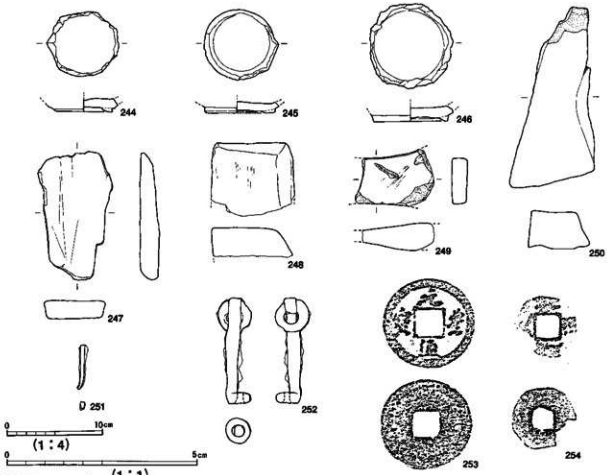
第24図　遺物実測図（1：4）

包含層

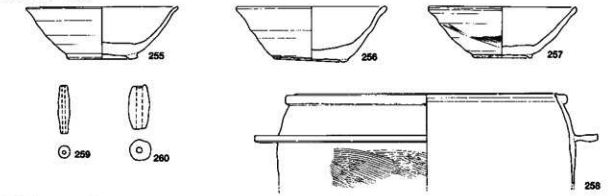


第25図　遺物実測図（1：4＝213～231・235～243、1：6＝232～234）

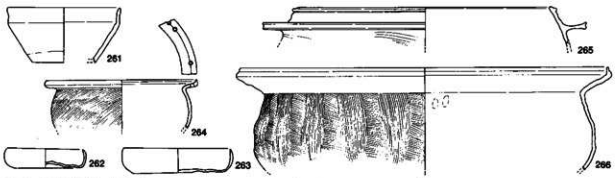
包含層（244～254）



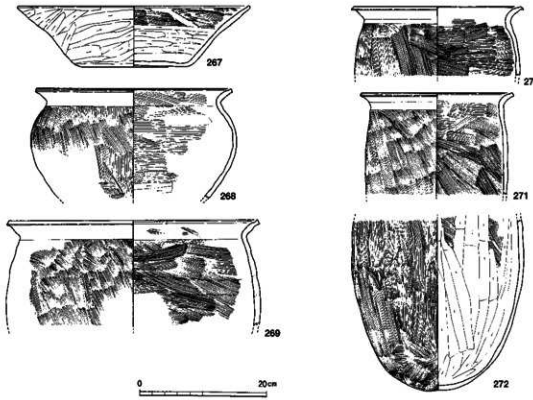
表採（255～263）



試掘（264～266）



第26図　遺物実測図（1：4＝244～252・255～266、1：1＝253・253・254）



第27図　遺物実測図（1：6）

概ね15世紀代に収まるものであろう。

土坑ＳＫ19出土土器(65)　ヒサゴ壺で、球形の体部をもつ。外面及び頸部内面にはヘラミガキが、口縁端部内面は強いナデがみられる。混入品である。

土坑Ｓ27出土土器(83～86)　83・84は山茶椀。85・86は土師器羽釜形鍋で15世紀前半と思われる。

土坑ＳＫ33出土土器（89～91）　90・91は土師器羽釜形鍋。89は斜方向のハケ調整を行った後に、縦方向にハケ調整を行っている。ともに15世紀前半。

土坑ＳＫ50出土土器(104～123)　多くの土器が一括して出土した。109～116は山茶椀。115・116は瀬美半島産のもの。藤澤編年の第５型式[10]頃と考えられる。107は土師器の甕の蓋。118～123は土師器の甕で、調整は粗い。概ね12世紀後半のものである。

土坑ＳＫ54出土土器(99～103)　99～101は南伊勢系の土師器皿。[9] 102・103は土師器鍋。これらは15世紀前半のもの。

土坑ＳＫ68出土土器(132・133)　132・133はともに底部の部分で、筒形土器の可能性が考えられる。

包含層出土土器(204～246)　208の底部には「α」状の墨書がみえる。223は白磁。224・225は青磁椀。223・224には草花文がみえる。222は瀬戸美濃産の鉄釉小皿。244～246は山茶椀の底部で加工円盤。

包含層出土石製品(247～250)　砥石として利用されたもの。247は４面とも使用している。248は、大半は欠損しているが、上・側面の２面を使用している。250は上面のみ使用しているが、面は粗い。

包含層出土銭(253・254)　253は北宋銭で「元豊通寶」。254は「天禧通寶」と思われるが、残存状態が悪いため判断できない。周囲を打ち欠いて円形に整形したような痕跡がみられる。

(６)近世以降

井戸ＳＥ48出土土器(135・136)　ともに常滑産の陶製井戸枠である。135は体部外面及び口縁部上面に、136は体部内外面にそれぞれ墨青がみられる。18世紀以降のものである。

(７)試掘坑出土土器

261は瀬戸美濃産のもので鉄釉の椀。262・263は南伊勢系の土師器皿。264～266は土師器鍋。264は小型のもので、口縁部には３ヶ所に直径3㎜程の焼成後の穿孔がみられる。

番号	整録番号	器別器形	グリッド遺構・層位	計測値(cm)	調整	胎土焼成	色調	残存	備考
1	091-01	弥生土器蓋	b11 SK12	口径 10.6 器高 4.9	ハケ・ナデ・オサエ・工具ナデ	密良	暗褐	ほぼ完形	
2	091-02	弥生土器蓋	b11 SK12	口径 9.7 器高 13.2	ハケ・ナデ・オサエ・工具ナデ・底部ケズリ	密良	暗褐	ほぼ完形	
3	035-01	弥生土器壺	c17 SK53	口径 9.2 器高 20.0	ハケ・ナデ・オサエ	やや粗良	にぶい橙	4/5	体部下半に穿孔あり
4	078-01	土師器器台	b16～c21 SD55	口径 10.8	ミガキ	やや密良	橙	口縁部1/7	
5	078-02	土師器器台	b16～c21 SD55		ミガキ・シボリ痕	やや密良	橙	小片	三方スカシ
6	082-05	土師器器台	c21 SD55	口径 10.7	ミガキ・ナデ	密良	橙	2/5	スカシあり
7	077-01	土師器鉢	b20 SD55	底径 4.6	ミガキ・ナデ・工具ナデ?	やや密良	橙	底部5/8	
8	082-01	土師器二重口縁壺	c21 SD55	口径 19.2	口縁部刺突文・ミガキ	やや密良	黄褐	1/10	内外面に赤彩
9	073-03	土師器二重口縁壺	b20 SD55	口径 43.8	口縁部刺突文・ミガキ	やや密良	にぶい橙	1/10	
10	082-04	土師器二重口縁壺	b18 SD55	口径 21.6	ミガキ	密良	橙	小片	
11	089-02	土師器二重口縁壺	c19 SD55		ミガキ・ナデ	やや粗良	淡褐	小片	ミガキは粗い
12	100-01	土師器二重口縁壺	b20 SD55	口径 18.6 器高 21.8	口縁部刺突文・櫛描横線文・綾形状刺突文・ミガキ・工具ナデ	密良	褐	完形	底部焼成後穿孔 底径5.6cm
13	083-01	土師器二重口縁壺	c18 SD55	口径 25.8	口縁部刺突文・ミガキ・ナデ	密良	淡赤褐	口縁部4/5	
14	052-05	土師器	c19 SD55	口径 24.9	ミガキ	やや粗良	にぶい橙	口縁部1/8	
15	082-02	土師器壺	b16～c21 SD55	底径 8.1		密良	橙	小片	底部焼成後穿孔
16	082-03	土師器壺	b16～c21 SD55	底径 8.1		密良	黄褐	小片	底部焼成後穿孔
17	078-03	土師器壺	b17 SD55	底径 5.7	ハケ・ナデ・オサエ・工具ナデ	粗良	橙	1/2	
18	084-01	土師器壺	a17 SD55	口径 15.5	櫛描横線文・ミガキ・ナデ・オサエ	密良	赤褐	1/3	
19	090-01	土師器壺	b18 SD55	頸径 9.9 底径 6.3	ハケ・工具ナデ?	密良	黄褐	2/3	カゴメ痕・口縁部打ち欠き 体部中位に焼成後穿孔
20	087-01	土師器二重口縁壺	d22 SD63	口径 13.6 器高 13.4	口縁部刺突文・ミガキ	密良	橙	4/5	
21	085-01	土師器壺	d21 SD63	底径 3.6	ミガキ・ハケ・ナデ・工具ナデ・一部ケズリ?	密良	橙	7/10	内部より鉄製出土
22	097-03	鉄製品鉄鏃	d21 SD63	長さ 5.1 厚さ 0.1					重量3.02g
23	083-02	土師器壺	d22 SD63	底径 5.0	不明	密良	淡橙	2/5	
24	097-02	土師器二重口縁壺	d21 SD63		刺突文・ミガキ・工具ナデ	密良	にぶい橙	小片	外面赤彩
25	076-04	土師器高杯	d21 SD63	口径 25.2	ミガキ・ナデ	やや粗良	にぶい橙	口縁部1/7	
26	076-02	土師器台付甕	d22 SD63	底径 4.7	ハケ・ナデ・工具ナデ	やや粗良	浅黄	底部1/3	
27	076-03	土師器高杯	d21 SD63	底径 17.7	ミガキ・ナデ	やや粗良	にぶい黄橙	小片	スカシあり
28	075-03	土師器高杯	d21 SD63	底径 11.3	櫛描文・刺突文・ミガキ	やや粗良	浅黄橙	小片	スカシあり
29	076-01	土師器鉢	d21 SD63	底径 7.9	ミガキ・ナデ	やや粗良	にぶい黄橙	底部1/4	底部焼成後穿孔
30	075-01	土師器鉢	a22 SD63	底径 4.5	ミガキ・ハケ・ナデ	粗良	橙	小片	
31	085-01	土師器鉢	c20 SD63	口径 15.6 器高 33.4	ハケ・ナデ・オサエ	やや密良	橙	9/10	カゴメ痕・内外面赤彩 底径6.4cm
32	068-01	土師器鉢	d14 SD75	口径 16.0 器高 29.0	櫛描横線文・刺突文・ミガキ・ハケ・工具ナデ・オサエ	密良	赤褐	1/3	口縁部内面に円形浮文
33	097-01	須恵器杯身	d20 SK21	口径 12.2 器高 3.7	ナデ 底部ヘラ切り後ケズリ	密良	灰白	ほぼ完形	体部外面に墨書、「乙」か?
34	002-03	土師器	d20 SK21	口径 24.2	ハケ・ナデ	やや密良	にぶい橙	口縁部1/12	
35	072-05	志摩式製塩土器	d20 SK21	口径 15.8 器高 7.8	ナデ・オサエ	粗良	淡橙	口縁部1/8	
36	072-04	志摩式製塩土器	d20 SK21	器高 7.7	ナデ・オサエ	やや粗良	にぶい橙	小片	
37	001-06	土師器杯	d20 SK22	口径 14.1	ミガキ・ナデ	やや密良	にぶい橙	口縁部1/10	
38	072-02	志摩式製塩土器	d20 SK22	口径 16.5 器高 7.4	工具ナデ・オサエ	やや粗良	にぶい橙	1/4	
39	051-06	土師器杯	c24 SD61	口径 12.4 器高 3.3	ミガキ	やや密良	橙	口縁部1/4	
40	051-09	土師器杯	c24 SD61	口径 13.9 器高 3.3	ミガキ・ケズリ・ナデ	やや密良	橙	1/10	
41	051-04	須恵器高杯	c24 SD61	口径 11.9 高台径	ナデ 底部ケズリ・貼付高台	やや密不良	灰白	底部1/4	

第2表　前田地区遺物観察表

番号	登録番号	種別器形	グリッド遺構・層位	計測値 (cm)	調整	胎土焼成	色調	残存	備考
42	051-03	須恵器 高杯	c 24 SD61	高台径12.0	ナデ 底部ケズリ・貼付高台	やや密良	灰	底部 1/4	
43	051-08	土師器 皿	c 24 SD61	口径 18.0 器高 2.1	ケズリ・ナデ	やや密良	浅黄	口縁部 1/10	
44	051-05	土師器 高杯	c 24 SD61	口径 13.0	ミガキ・ナデ	やや粗良	にぶい黄橙	口縁部 1/5	
45	094-01	土師器 杯	c 24 SD61	口径 12.8 器高 3.4	ミガキ・ナデ	やや密良	橙	1/2	底部に墨書、方は「宅」
46	077-03	土師器 壺	c 24 SD61		円形竹管文・ミガキ 無節突帯	やや粗良	橙	小片	
47	051-01	土師器 壺	c 24 SD61	口径 22.8	ハケ・ナデ	やや密良	にぶい橙	口縁部 1/6	
48	051-02	土師器 壺	c 24 SD61	口径 24.9	ハケ・ナデ	やや粗良	浅黄橙	口縁部 1/8	
49	051-07	土錘	c 24 SD61	幅 1.6 穴径 0.4		やや密良	にぶい黄橙	ほぼ完形	残重量11.72g
50	037-01	土師器 鉢	d 19 SK59	口径 20.1 器高 2.9	ミガキ・ナデ・ケズリ 内面螺旋状・放射状暗文	やや密良	灰白	1/2	
51	055-05	土師器 甕	d 19 SK59	口径 20.7 器高 2.6	ミガキ・ナデ 内面螺旋状暗文	やや密良	橙	1/4	底部に墨書
52	055-06	土師器 鉢	d 19 SK59	口径 15.6	ミガキ・ケズリ・ナデ	やや密良	橙	口縁部 1/11	
53	041-02	土師器 鉢	d 19 SK59	口径 21.1	ミガキ・ケズリ・ナデ	やや密良	橙	口縁部 1/12	
54	054-01	土師器 甕	d 19 SK59	口径 30.1	ハケ	やや密良	灰褐	口縁部 1/6	把手あり
55	032-02	瀬戸 椀	e 19 SE49	口径 15.3 器高 5.3	ケズリ 施釉	やや粗良	灰白	1/2	内面にトチン痕あり 釉（オリーブ灰色）
56	034-05	土師器 皿	e 19 SE49	口径 11.8	ナデ・オサエ	密良	浅黄橙	1/5	
57	034-03	土師器 壺	e 19 SE49	口径 23.2	ナデ・オサエ・工具ナデ	やや密良	にぶい橙	口縁部 1/10	
58	009-01	土師器 鍋	e 19 SE49	口径 22.2 器径 27.7	ハケ・ナデ	やや密良	浅黄橙	1/5	鍔部以下煤付着
59	032-01	土師器 鍋	e 19 SE49	口径 21.1	ハケ・ケズリ・ナデ	やや密良	浅黄橙	4/5	外面に煤付着
60	034-01	土師器 鍋	e 19 SE49	口径 33.8	ハケ・ケズリ・ナデ・オサエ・工具ナデ	やや粗良	浅黄橙	3/5	外面に煤付着
61	009-02	常滑 壺	e 19 SE49	口径 37.3	ナデ	やや密良	にぶい赤褐	口縁部 1/10	
62	055-03	須恵器 山茶椀	e 19 SE48	高台径 9.2	ナデ 底部糸切り・貼付高台	やや密良	灰白	底部 1/4	高台に籾がら痕あり
63	024-02	石製品 紡石	b 8 SD 8				暗灰黄		4面使用
64	025-01	土師器 鍋	b 9 SD 8	口径 24.2 器径 31.8	ハケ・ケズリ・ナデ・オサエ	やや密良	淡黄	口縁部 1/9	鍔部以下煤付着
65	024-01	土師器 ヒサゴ壺	a 12 SK19	口径 7.4	ミガキ・ナデ・オサエ	やや粗良	橙	1/2	混入品
66	064-01	加工円盤	b 17 SD57	長径 2.0 厚径 0.8		密良	灰		
67	001-01	土師器 皿	b 4 SK 1	口径 11.1 器高 2.1	ナデ・オサエ	やや粗良	浅黄橙	完形	
68	001-02	土師器 皿	c 5 SK 2	口径 11.4 器高 2.4	ナデ・オサエ	やや密良	灰白	5/6	
69	003-01	陶器 山茶椀	c 5 SK 3	口径 13.7 器高 5.5	ナデ 底部糸切り・貼付高台	やや粗不良	灰白	1/3	高台に籾がら痕あり
70	002-01	土師器 鍋	c 5 SK 3	口径 25.8	ハケ・ナデ	粗良	灰黄褐	小片	外面に煤付着
71	003-02	土師器 鍋	b 4 SK 3	口径 23.2 鍔径 31.9	ハケ・ナデ・工具ナデ	やや粗良	淡黄	小片	鍔部以下煤付着
72	005-01	土師器 鍋	c 5 SK 3	口径 28.6	ハケ・ケズリ・ナデ	やや粗良	浅黄橙	1/3	外面に煤多く付着
73	004-01	常滑 壺	c 5 SK 3	口径 26.0	ナデ	やや粗良	にぶい赤褐	口縁部 1/6	
74	001-04	土師器 皿	b 4 SK 4	口径 10.4 器高 2.9	ナデ・オサエ・板目状圧痕	やや密良	淡黄	7/10	
75	006-02	陶器 山茶椀	b 4 SK 4	口径 16.1 器高 6.2	ナデ 底部ナデ・貼付高台	密良	灰白	3/4	高台に籾がら痕あり 煤付着
76	006-01	土師器 鍋	b 4 SK 4	口径 31.2 鍔径 41.5	ハケ・ナデ・オサエ	やや粗良	灰白	1/5	
77	001-05	土師器 皿	c 5 SK 6	口径 8.1 器高 1.1	ナデ・オサエ	粗良	灰白	完形	
78	001-03	土師器 皿	c 5 SK 6	口径 11.1 器高 2.8	ナデ・オサエ	やや密良	灰黄褐	3/5	
79	003-03	陶器 山茶椀	c 5 SK 6	高台径 8.1	ナデ 底部糸切り後ナデ・貼付高台	やや密良	灰白	底部 3/4	高台に籾がら痕あり
80	002-02	陶器 山茶椀	c 6 SK13	口径 9.0 器高 3.4	ナデ 貼付高台	やや粗良	灰白	2/5	
81	011-01	須恵器 杯蓋	c 23 SK26	口径 12.6 器高 3.9	ケズリ・ナデ	やや密良	灰	1/3	つまみ径2.4cm
82	011-07	土錘	c 23 SK26	最大長 5.3 最大幅 3.1		やや密良	にぶい橙	完形	穴径0.8cm 重量41.69g

第3表　前田地区遺物観察表

番号	登録番号	種別器形	グリッド 遺構・層位	計測値 (cm)	調整	胎土 焼成	色調	残存	備考
83	011-04	陶器 山茶椀	c 22～c 23 S K27	口径 6.8 器高 2.6	ナデ 底部糸切り	やや密 良	灰黄褐	1/2	
84	061-02	陶器 山茶椀	c 22～c 23 S K27	高台径 7.7	ナデ 底部糸切り後ナデ・貼付高台	密 良	灰 白	底部 1/2	高台に刷がら痕あり
85	061-01	土師器 鍋	c 22～c 23 S K27	口径 24.4 鍔径 33.0	ナデ	やや粗 良	淡 黄	口縁部 1/7	鍔部以下煤付着
86	007-01	土師器 鍋	c 22～c 23 S K27	口径 25.2 鍔径 31.0	ハケ・ケズリ・ナデ・オサエ	やや密 良	灰 白	口縁部 1/2	
87	052-03	陶器 山茶椀	b 22 S K30	底径 5.4	ナデ 底部糸切り	粗 良	灰 白	底部 2/3	底部外面にトチン痕あり
88	011-02	陶器 山茶椀	b 22 S K30	口径 14.2 器高 4.4	ナデ 底部糸切り	粗 良	灰 白	1/5	
89	052-02	陶器 山茶椀	b 21 S K33	高台径 7.7	ナデ 底部糸切り・貼付高台	やや密 良	灰 白	底部 1/2	
90	010-03	土師器 鍋	b 21 S K33	口径 21.0 鍔径 28.6	格子状ハケ・ナデ・オサエ	やや密 良	灰 白	口縁部 1/9	
91	008-01	土師器 鍋	b 21 S K33	口径 26.0 鍔径 33.7	ハケ・ナデ・オサエ	やや密 良	灰 白	口縁部 1/3	鍔部以下煤付着
92	062-05	陶器 山茶椀	d 21～c 23 S K35	高台径 8.0	ナデ 底部糸切り・貼付高台	密 良	灰 白	1/2	
93	010-02	土師器 甕	c 20 S K37	口径 24.0	ハケ・ナデ	やや密 良	にぶい 黄 橙	口縁部 1/12	
94	011-05	土師器 皿	c 19～c 20 S K38	口径 11.4 器高 2.4	ナデ・オサエ	やや密 良	灰 白	2/3	
95	011-03	瓦質器 杯身	b 18～c 20 S K40	口径 10.7 器高 3.3	底部ケズリ	やや粗 良	灰	1/10	
96	011-06	土師器 皿	b 18～c 20 S K40	口径 12.2 器高 2.2	ナデ・オサエ	やや密 良	灰 白	1/4	
97	010-01	土師器 甕	b 19 S K41	口径 25.2	ハケ・ナデ	やや密 良	にぶい 黄 橙	口縁部 1/8	
98	009-04	灰釉陶器 皿	c 17～c 18 S K47	口径 8.4 器高 2.4	ナデ・底部糸切り 施釉	密 良	灰 白	完形	釉（灰白色）
99	037-04	土師器 皿	b 20 S K54	口径 9.2 器高 2.6	ナデ・オサエ	やや密 良	灰 白	ほぼ 完形	
100	037-05	土師器 皿	b 20 S K54	口径 9.2 器高 2.8	ナデ・オサエ	やや密 良	灰 白	1/2	
101	037-03	土師器 皿	b 20 S K54	口径 9.6 器高 2.6	ナデ・オサエ 内面工具ナデ	やや密 良	灰 白	完形	
102	036-02	土師器 鍋	b 20 S K54	口径 36.0 鍔径 48.6	ハケ・ナデ・オサエ	やや密 良	灰 白	口縁部 1/10	
103	036-01	土師器 鍋	b 20 S K54	口径 29.9	ハケ・ナデ	やや密 良	灰 白	口縁部 1/6	
104	029-03	土師器 皿	d 19 S K50	口径 9.2 器高 2.2	ナデ・オサエ	やや密 良	にぶい 黄 橙	1/3	
105	009-05	土師器 皿	d 19 S K50	口径 8.9 器高 1.5	ナデ・オサエ	やや密 良	灰 白	4/5	
106	026-04	土師器 皿	d 19 S K50	口径 12.9	ナデ	やや密 良	浅黄橙	1/8	
107	026-06	土師器 鍋	d 19 S K50	口径 19.9	ナデ・オサエ 底部ケズリ	やや粗 良	にぶい 黄 橙	1/8	外面に煤付着
108	072-01	志摩式製塩土器	d 19 S K50		ナデ・オサエ	やや粗 良	橙	小片	
109	026-01	陶器 山茶椀	d 19 S K50	口径 8.6 器高 2.6	ナデ 貼付高台	やや密 良	灰 白	1/2	高台に刷がら痕あり
110	026-03	陶器 山茶椀	d 19 S K50	口径 9.0 器高 5.0	ナデ 貼付高台	やや密 良	灰	4/5	
111	062-04	陶器 山茶椀	d 19 S K50	高台径 8.1	ナデ 底部ナデ・貼付高台	やや粗 良	灰 白	1/2	高台に刷がら痕あり
112	061-04	陶器 山茶椀	d 19 S K50	高台径 8.0	ナデ 底部糸切り・貼付高台	密 良	灰 白	1/2	
113	062-01	陶器 山茶椀	d 19 S K50	高台径 8.7	ナデ 底部ナデ・貼付高台	やや粗 良	灰 白	1/2	高台に刷がら痕あり
114	062-02	陶器 山茶椀	d 19 S K50	高台径 8.3	ナデ 底部ナデ・貼付高台	やや粗 良	灰 黄	3/4	高台に砂圧痕あり
115	029-04	陶器 山茶椀	d 19 S K50	口径 15.8 器高 4.9	ナデ 底部ナデ・貼付高台	やや粗 良	灰 白	2/5	高台径7.5cm
116	026-02	陶器 山茶椀	d 19 S K50	口径 17.2 器高 9.2	ナデ 底部糸切り・貼付高台	やや密 良	灰 白	1/4	
117	026-05	土錘	d 19 S K50	最大径 4.5 最大幅 1.4		密 良	にぶい 橙	完形	穴径0.3cm 重量0.6g
118	034-02	土師器 甕	d 19 S K50	口径 19.5	ハケ・ナデ・オサエ・工具ナデ	やや密 良	灰 褐	口縁部 1/6	
119	029-01	土師器 甕	d 19 S K50	口径 20.5	ハケ・ナデ・オサエ・工具ナデ	粗 良	浅黄橙	口縁部 1/5	
120	034-01	土師器 甕	d 19 S K50	口径 19.6	ハケ・ナデ・オサエ・工具ナデ	やや密 良	にぶい 褐	口縁部 1/7	
121	029-02	土師器 甕	d 19 S K50	口径 19.8	ナデ・オサエ	粗 良	にぶい 黄 橙	口縁部 2/5	外面に煤付着
122	027-01	土師器 甕	d 19 S K50	口径 22.0	ハケ・ケズリ・ナデ・オサエ・工具ナデ	粗 良	灰 褐	1/3	
123	028-01	土師器 甕	d 19 S K50	口径 24.6	ナデ・オサエ	やや粗 良	にぶい 褐	口縁部 7/8	内外面に煤付着

第４表　前田地区遺物観察表

番号	整理番号	種別器形	グリッド 遺構・層位	計測値 (cm)	調整	胎土 焼成	色調	残存	備考
124	033-01	土師器 鍋	b22 SK60	口径 29.2 器径 36.8	ハケ・ケズリ・ナデ・オサエ	やや密 良	炭黒	4/5	内面に炭化物付着
125	070-02	陶器 山茶椀	b22～b23 SK62	底径 5.8	ナデ 底部糸切り	粗 良	灰白	底部 4/5	底部に墨書
126	095-01	土師器 坩堝使	b22～b23 SK62	口径 23.4	ハケ・ナデ	やや密 良	にぶい黄	小片	
127	052-04	陶器 山皿	b19～b20 SK70	口径 7.8 器高 2.2	ナデ 底部糸切り	やや密 良	灰	1/3	底厚3.8cm
128	052-01	陶器 山茶椀	c18～d18 SK72	高台径 7.0	ナデ 底部糸切り・貼付高台	密 良	灰白	3/5	高台に剥がら痕あり
129	055-07	陶器 山茶椀	b20 SF74	底径 5.3	ナデ 底部糸切り	粗 良	灰黄	底部 1/4	底部外面にトチン痕あり
130	055-04	陶器 山茶椀	b20 SF74	高台径 7.8	ナデ 底部糸切り・貼付高台	やや密 良	灰白	底部 1/4	
131	056-01	常滑 甕	b20 SE74	口径 37.8	タタキ・ナデ・オサエ	やや粗 良	にぶい赤褐	口縁部 1/4	
132	096-01	土師器	d20～d21 SK68	底径 12.0	ハケ・ナデ・オサエ	やや密 良	にぶい橙	底部 1/4	焼形土器? 内面に接合痕あり
133	096-02	土師器	d20～d21 SK68	底径 18.5	ハケ・タタキ	やや粗 良	橙	底部 1/6	焼形土器? 内面に接合痕あり
134	098-01	鉄製品	d19 SK59						重量57.5g
135	080-01	陶器 井戸枠	c19 SE48	口径 67.0 底高 38.0	ナデ	やや粗 良	橙	ほぼ完形	口縁部上面・体部外面に墨書 常滑産陶製井戸枠（2段目）
136	079-01	陶器 井戸枠	c19 SE48	口径 66.2 器高 37.0	ナデ	やや粗 良	橙	ほぼ完形	体部外面に墨書 常滑産陶製井戸枠（3段目）
137	020-02	縄文土器	b2 包含層		不明	やや粗 良	灰褐	小片	
138	094-03	弥生土器 壺	b10 包含層	口径 19.2	口縁部刻み・ハケ・ナデ	密 良	にぶい黄橙	口縁部 1/10	
139	041-03	土師器 壺	d23 包含層		ミガキ・ナデ 口縁部円形竹管文	やや粗 良	にぶい橙	小片	
140	073-01	土師器 壺	d22 包含層	口径 24.6	ミガキ・ナデ 口縁部円形竹管文	やや密 良	にぶい橙	口縁部 1/6	
141	073-02	土師器 壺	b17 包含層	口径 14.7	ミガキ	やや密 良	にぶい橙	小片	
142	089-01	土師器 高杯	d16 包含層	口径 14.7	ミガキ	密 良	明赤褐	小片	
143	090-01	土師器 壺	d16 包含層	底径 6.2	ミガキ・ハケ	密 良	明赤褐	1/5	
144	041-04	土師器 甕	d20 包含層	口径 22.4	ナデ・オサエ	やや粗 良	にぶい橙	口縁部 1/8	
145	015-03	円筒埴輪	b20 包含層		ハケ・ナデ	やや密 良	にぶい橙	小片	
146	074-04	円筒埴輪	d21 包含層		ハケ・ナデ	やや密 良	浅黄	小片	スカシあり
147	050-03	土師器 杯	b21 包含層	口径 13.0	ナデ	やや粗 良	にぶい黄橙	口縁部 1/8	外面に接合痕あり
148	040-05	土師器 杯	d21 包含層	口径 12.4 器高 4.8	ケズリ・ナデ・オサエ	やや粗 良	にぶい橙	1/3	
149	042-03	土師器 杯	c20 包含層	口径 11.9	ミガキ・ナデ	やや密 不良	橙	1/10	
150	017-03	土師器 杯	d20 包含層	口径 12.2 器高 3.0	ミガキ・ナデ・オサエ 底部ケズリ	密 良	橙	1/4	
151	042-04	土師器 杯	c21 包含層	口径 13.0 器高 3.0	ナデ	密 不良	にぶい黄橙	1/10	
152	077-02	土師器 杯	b21 包含層	口径 12.9 器高 3.6	ミガキ・ナデ	密 良	橙	3/8	
153	015-07	土師器 杯	b20 包含層	口径 16.0 器高 4.1	ミガキ 底部ケズリ	やや密 良	橙	小片	
154	042-06	土師器 杯	c22 包含層	口径 17.8	ミガキ・ナデ	密 良	浅黄橙	口縁部 1/10	
155	049-03	土師器 皿	b25 包含層	口径 17.5 器高 3.0	ミガキ・ナデ・オサエ	やや粗 良	にぶい橙	1/4	
156	016-04	土師器 皿	b20 包含層	口径 15.8 器高 2.2	ナデ 底部ケズリ	やや密 良	橙	小片	
157	016-03	土師器 皿	b20 包含層	口径 16.6 器高 1.7	ナデ 底部ケズリ	やや密 良	橙	口縁部 1/10	
158	049-05	土師器 皿	b21 包含層	口径 15.6 器高 2.2	ナデ	やや粗 良	にぶい橙	小片	
159	017-01	土師器 皿	d18 包含層	口径 15.6 器高 2.5	ナデ 内面放射状暗文	密 良	橙	口縁部 1/6	
160	018-05	土師器 皿	d18 包含層	口径 16.6 器高 3.0	ミガキ・ナデ・底部ケズリ 内面放射状暗文	密 良	橙	小片	口縁部内面に沈線あり
161	018-07	土師器 椀	d18 包含層	口径 20.1 器高 5.8	ミガキ・ナデ 貼付高台	密 良	明赤褐	1/3	外面黒褐色
162	040-03	土師器 皿	d22 包含層	口径 13.0	ミガキ・ナデ 内面暗文	やや密 良	にぶい橙	口縁部 1/3	
163	016-01	土師器 皿	b19 包含層	口径 13.3 器高 3.3	ミガキ 底部ケズリ・内面暗文	やや密 良	橙	2/5	
164	046-01	土師器 皿	b23 包含層	口径 12.8	ミガキ・ナデ 内面螺旋状・放射状暗文	やや密 良	橙	1/8	

第5表　前田地区遺物観察表

番号	登録番号	種別器形	グリッド 遺構・層位	出土位置(cm)	調整	胎土 焼成	色調	残存	備考
165	067-02	土師器 皿	c 20 包含層	口径 16.1 器高 2.4	ミガキ・ナデ 内面螺旋状・放射状暗文	やや密 良	橙	小片	
166	067-01	土師器 皿	c 20 包含層	口径 17.0 器高 2.6	ミガキ・ナデ・オサエ 内面螺旋状暗文	やや密 良	橙	1/4	
167	049-04	土師器 鉢	b 21 包含層	口径 15.8 器高 2.3	ミガキ・ナデ・オサエ 内面螺旋状暗文	やや粗 良	橙	1/9	
168	048-03	土師器 鉢	b 20 包含層	口径 16.0 器高 3.9	ミガキ・ナデ・オサエ 内面螺旋状・放射状暗文	やや密 良	橙	1/4	
169	043-07	土師器 鉢	b 18 包含層	口径 17.0 器高 4.3	ミガキ・ナデ・オサエ 底部ケズリ・内面暗文	やや密 良	橙	1/3	
170	094-02	土師器	d 18 包含層		内面螺旋状暗文	やや粗 良	橙	小片	底部に墨書、方は「宅」
171	018-09	土師器 杯	d 18 包含層	口径 9.0 器高 2.3	ナデ	やや密 良	灰 白	口縁部 1/3	
172	050-02	土師器 杯	b 21 包含層	口径 11.8	ナデ	やや粗 良	にぶい 橙	口縁部 1/8	外面に煤付着
173	049-02	土師器 杯	b 20 包含層	口径 15.3 器高 3.7	ナデ	やや密 良	橙	1/5	
174	067-04	土師器 杯	c 20 包含層	口径 16.1	ナデ	やや密 良	にぶい 橙	口縁部 1/9	
175	048-03	土師器 杯	d 18 包含層	口径 13.4 器高 2.7	ナデ・オサエ	やや密 良	浅黄橙	1/3	
176	040-04	土師器 杯	d 20 包含層	口径 15.9 器高 2.8	ナデ・オサエ	やや粗 良	橙	口縁部 1/10	
177	042-07	土師器 杯	b 25 包含層	口径 15.8	ナデ・オサエ	密 良	橙	2/5	
178	046-02	土師器 杯	d 19 包含層	口径 15.5	ナデ	やや密 良	淡 橙	口縁部 1/8	
179	066-04	須恵器 杯蓋	c 20 包含層	口径 11.7 器高 3.3	ナデ	やや密 良	灰	1/3	
180	043-04	須恵器 杯蓋	c 22 包含層	口径 14.0	ケズリ・ナデ	密 良	灰 白	1/4	
181	048-02	須恵器 杯蓋	b 19 包含層	口径 19.0 器高 3.9	ケズリ・ナデ	やや密 良	灰 白	1/4	
182	043-06	須恵器 杯身	d 17 包含層	口径 11.2 器高 3.9	ケズリ・ナデ 底部へラ切り後ナデ	粗 良	暗 灰	3/4	
183	015-05	須恵器 杯身	b 14 包含層	口径 11.8 器高 3.3	ナデ 底部ケズリ	密 良	灰	口縁部 1/7	
184	047-05	須恵器 杯身	b 24 包含層	口径 12.4 器高 3.7	ナデ 底部ケズリ	やや粗 良	緑 灰	1/6	
185	012-02	須恵器 杯身	d 22 包含層	口径 16.4 器高 3.7	ナデ 底部ケズリ・貼付高台	密 やや良	灰 黄	1/2	
186	066-03	須恵器 杯身	c 20 包含層	口径 17.7 器高 5.6	ナデ 底部ケズリ	やや密 良	灰	1/6	
187	071-02	志摩式製塩土器	c 19 包含層	口径 15.5	ナデ・オサエ	やや粗 良	淡 橙	小片	
188	071-05	志摩式製塩土器	d 20 包含層	口径 15.4 器高 6.7	ナデ・オサエ	やや粗 良	にぶい 橙	小片	
189	071-04	志摩式製塩土器	d 18 包含層	口径 15.8 器高 6.7	オサエ・工具ナデ	やや粗 良	にぶい 橙	口縁部 1/7	
190	071-03	志摩式製塩土器	d 18 包含層	口径 17.8 器高 5.3	オサエ・工具ナデ	やや粗 良	にぶい 橙	小片	
191	071-01	志摩式製塩土器	d 20 包含層	口径 14.8	ナデ・オサエ	やや粗 良	浅黄橙	口縁部 1/3	
192	072-06	志摩式製塩土器	b 18 包含層		ナデ・オサエ	やや粗 良	橙	小片	
193	072-03	志摩式製塩土器	b 21 包含層		ナデ・オサエ	やや粗 良	にぶい 橙	小片	
194	068-01	土師器 甕	d 17 包含層	口径 17.3	ハケ・ナデ	やや密 良	灰 白	口縁部 1/6	内外面に煤付着
195	068-02	土師器 甕	b 18 包含層	口径 18.6	ハケ・ナデ	やや粗 良	にぶい 橙	口縁部 1/8	
196	012-03	土師器 甕	d 24 包含層	口径 15.2	ハケ・ナデ・工具ナデ	やや密 良	にぶい 褐	口縁部 1/5	
197	045-04	土師器 甕	d 18 包含層	口径 16.2	ハケ・ナデ・工具ナデ	やや密 良	浅黄橙	口縁部 1/8	
198	094-04	土師器 甕	d 23 包含層	口径 18.6	ハケ・ナデ	やや粗 良	にぶい 黄 橙	口縁部 1/3	
199	042-01	土師器 甕	c 20 包含層	口径 21.6	ハケ・ナデ	密 良	にぶい 橙	口縁部 1/5	口縁部外面に煤付着
200	074-02	土師器 甕	d 13 包含層	口径 23.6	ハケ・ナデ	やや密 良	にぶい 橙	口縁部 1/6	
201	040-02	土師器 甕	d 23 包含層	口径 25.8	ハケ・ナデ	やや密 良	浅黄橙	口縁部 1/10	外面に煤付着
202	047-01	土師器 長胴甕	b 24 包含層	口径 23.2	ハケ・ナデ・工具ナデ	やや粗 良	にぶい 橙	口縁部 1/6	
203	053-01	土師器 長胴甕	c 19 包含層	口径 23.0	ハケ・ナデ	やや粗 良	にぶい 褐	口縁部 1/8	
204	066-06	陶器 山皿	b 22 包含層	口径 8.6 器高 1.9	ナデ 底部糸切り	やや密 良	灰 白	1/2	
205	047-03	陶器 山皿	d 18 包含層	口径 8.4 器高 1.9	ナデ 底部糸切り	やや粗 良	灰 白	1/3	

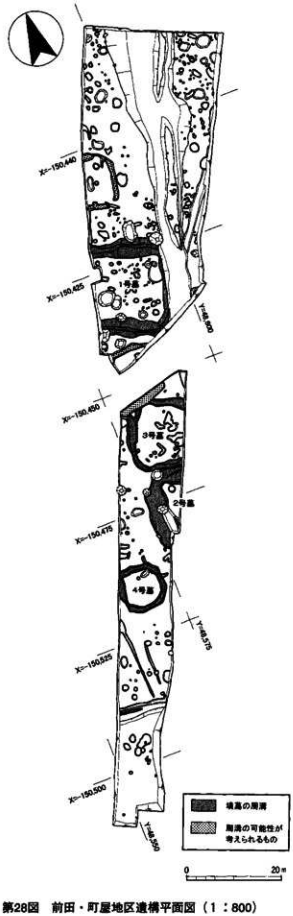
第6表　前田地区遺物観察表

番号	登録番号	種別器形	グリッド 遺構・層位	計測値 (cm)	調整	胎土 焼成	色調	残存	備考
206	041-05	陶器 山皿	d 21 包含層	口径 8.1 器高 2.3	ナデ 底部糸切り	やや密良	灰白	7/8	
207	047-02	陶器 山皿	b 22 包含層	口径 8.6 器高 2.0	ナデ 底部糸切り	やや密良	灰白	1/3	
208	070-03	陶器 山茶椀	b 18 包含層	底径 6.0	ナデ 底部糸切り	粗良	灰白	底部 1/3	底部に墨書
209	023-01	陶器 山茶椀	c 10 包含層	口径 13.8 器高 5.6	ナデ 底部糸切り・貼付高台	粗良	灰白	1/3	高台に刷がら板あり 高台径5.8cm
210	056-02	陶器 山茶椀	a 23 包含層	口径 13.0 器高 5.1	ナデ 底部糸切り・張状圧痕あり	やや粗良	灰白	口縁部 1/6	
211	012-01	陶器 山茶椀	d 24 包含層	口径 15.8 器高 3.7	ナデ 貼付高台	やや粗良	灰白	3/5	高台に刷がら板あり 高台径6.8cm
212	056-01	陶器 山茶椀	b 21 包含層	口径 16.7 器高 6.1	ナデ 底部糸切り・貼付高台	やや密良	灰黄	3/5	高台に刷がら板あり 高台径7.2cm
213	042-05	土師器 皿	c 22 包含層	口径 8.0 器高 2.0	ナデ・オサエ	やや粗良	浅黄橙	9/10	
214	043-02	土師器 皿	c 22 包含層	口径 8.7 器高 2.5	ナデ・オサエ	やや密良	灰白	ほぼ完形	
215	015-04	土師器 皿	b 24 包含層	口径 10.7 器高 2.1	ナデ・オサエ・工具ナデ	やや密良	灰白	1/5	
216	052-06	土師器 皿	c 19 包含層	口径 11.3 器高 2.8	ナデ・オサエ・工具ナデ	やや密良	灰白	2/3	
217	054-02	土師器 皿	b 25 包含層	口径 11.2 器高 2.3	ナデ・オサエ	密良	灰白	ほぼ完形	
218	015-05	土師器 皿	b 23 包含層	口径 10.5 器高 2.1	ナデ・オサエ	やや密良	浅黄橙	1/5	
219	070-01	土師器 皿	c 20 包含層		ナデ	やや密良	淡橙	小片	底面に墨書
220	017-05	土師器 皿	d 18 包含層	口径 7.2 器高 1.3	ナデ・オサエ	密良	灰白	2/5	
221	018-02	土師器 皿	c 21 包含層	口径 7.5 器高 1.6	ナデ・オサエ	やや密良	にぶい黄橙	1/5	
222	066-07	瀬戸美濃 皿	b 22 包含層	口径 5.6 器高 1.6	ナデ・施釉 底部糸切り	やや密良	淡橙	完形	鉄釉（褐色）
223	017-04	白磁 椀	c 19 包含層	底径 4.0	ナデ・施釉 底部ケズり	密良	灰白	底部 1/2	釉（明オリーブ灰色）
224	048-04	青磁 椀	b 21 包含層	高台径 5.3	施釉 ケズり出し高台	密良	灰白	底部完形	内面に草花文 釉（灰オリーブ色）
225	069-05	青磁 椀	c 20 包含層	高台径 7.0	施釉 ケズり出し高台	密良	灰白	底部 1/4	釉（明緑灰色）
226	041-01	土師器 鍋	d 20 包含層	口径 22.4	ナデ・オサエ	やや粗良	にぶい橙	口縁部 1/8	外面に煤付着
227	038-02	土師器 鍋	c 21 包含層	口径 27.6	ハケ・ナデ	やや粗良	にぶい黄橙	口縁部 1/4	外面に煤付着
228	040-01	土師器 鍋	d 23 包含層	口径 27.7	ハケ・ケズリ・ナデ	やや粗良	淡橙	口縁部 1/7	外面に煤付着
229	050-01	土師器 鍋	b 20 包含層	口径 28.2	ハケ・ナデ・オサエ	やや密良	にぶい橙	小片	外面に煤付着
230	038-01	土師器 鍋	d 21 包含層	口径 25.4 脚径 31.4	ハケ・ナデ	やや密良	灰白	口縁部 1/2	脚部以下煤付着
231	044-01	土師器 鍋	b 22 包含層	口径 29.6 脚径 36.8	ハケ・ナデ・オサエ	密良	浅黄橙	口縁部 1/4	脚部以下煤付着
232	045-01	土師器 鍋	b 21 包含層	口径 35.8 脚径 49.7	ハケ・ナデ・工具ナデ	粗良	浅黄橙	口縁部 1/4	
233	014-02	常滑 壺	b 25 包含層	口径 30.6	ナデ	やや密良	灰	口縁部 1/10	
234	014-01	常滑 壺	b 20 包含層	口径 40.6	ナデ	密良	にぶい赤褐	口縁部 1/14	
235	044-02	常滑 壺	b 23 包含層	底径 12.3	ハケ・ナデ・オサエ	やや密良	にぶい橙	底部 2/3	
236	018-01	土錘	d 18 包含層	最大幅 1.1		やや密良	橙	一部欠損	穴径1.0cm 重量23.8g
237	018-04	土錘	d 18 包含層	最大幅 2.6		やや粗良	浅黄橙	一部欠損	穴径0.3cm 重量4.2g
238	016-06	土錘	b 25 包含層	最大幅 2.6		やや粗良	にぶい橙	一部欠損	穴径1.0cm 重量37.96g
239	039-03	土錘	d 21 包含層	最大長 5.6 最大幅 2.7		やや密良	にぶい橙	完形	穴径1.1cm 重量32.57g
240	016-05	土錘	b 24 包含層	最大長 8.7 最大幅 2.8		やや密良	灰白	ほぼ完形	穴径0.9cm 重量49.8g
241	023-02	土錘	d 21 包含層	最大長 8.1 最大幅 3.1		やや密良	にぶい橙	ほぼ完形	穴径1.0cm 重量65.3g
242	039-02	土錘	d 18 包含層	最大長 8.3 最大幅 2.8		やや密良	灰白	完形	穴径1.0cm 重量48.0g
243	039-01	土錘	c 21 包含層	最大長 7.4 最大幅 2.7		やや密良	にぶい橙	ほぼ完形	穴径1.1cm 重量40.22g
244	063-03	山茶椀 加工円盤	d 21 包含層	高台径 5.8	ナデ 底部糸切り・貼付高台	やや密良	灰白	底部完形	高台に刷がら板あり
245	063-04	山茶椀 加工円盤	b 22 包含層	高台径 7.4	ナデ 底部糸切り・貼付高台	密良	にぶい黄橙	底部完形	
246	063-02	山茶椀 加工円盤	d 23 包含層	高台径 7.7	ナデ 底部糸切り・貼付高台	密良	灰白	底部完形	

第７表　前田地区遺物観察表

番号	登録番号	機例器形	グリッド遺構・層位	計測値 (cm)		調整	胎土 焼成	色調	残存	備考
247	064-03	石製品 砥石	a 24 包含層					灰 オリーブ	ほぼ 完形	2面使用
248	018-08	石製品 砥石	c 22 包含層					赤 褐	小片	2面使用
249	012-04	石製品 砥石	d 22 包含層					にぶい 赤褐色	小片	4面使用
250	048-01	石製品 砥石	b 18 包含層					にぶい 黄 褐	ほぼ 完形	1面使用
251	023-03	鉄製品 針？	c 12 包含層						小片	
252	098 03	鉄製品 馬具	a 22 包含層						完形	重量86.6g
253	030-03	銭	c 16 包含層	直径 厚さ	2.4 0.1				完形	元寸通寶 重量2.495g
254	030-04	銭	b 24 包含層	厚さ	0.1				一部 欠損	「元祐通寶」か？ 重量0.7g
255	019-03	陶器 山茶椀	表採	口径 器高	15.8 5.5	ナデ 底部糸切り・貼付高台	やや密 良	灰 黄	完形	高台径7.4cm
256	020-01	陶器 山茶椀	表採	口径 器高	15.6 5.6	ナデ 貼付高台	やや粗 良	灰 白	3/5	高台に粉がら痕あり 高台径7.8cm
257	019-02	陶器 山茶椀	表採	口径 器高	15.2 5.4	ナデ・一部ハケ 底部糸切り・貼付高台	やや粗 良	灰黄褐	2/5	高台に粉がら痕あり 高台径6.4cm
258	019-01	土師器 鍋	表採	口径 胴径	16.4 36.4	ハケ・ナデ	やや粗 良	褐	口縁部 1/7	
259	020-03	土錘	表採	最大長 最大幅	5.1 1.2		やや密 良	橙	完形	穴径0.3cm 重量5.28g
260	020-04	土錘	表採	最大長 最大幅	4.5 2.3		やや粗 良	にぶい 黄 橙	ほぼ 完形	穴径0.5cm 重量21.63g
261	092-01	瀬戸美濃 椀	試掘坑 No. 2	口径 器高	12.0	ケズリ・ナデ 施釉	密 良	灰 白	口縁部 1/6	鉄釉（黒色）
262	093-02	土師器 皿	試掘坑 No. 5	口径 器高	7.8 2.1	ナデ・オサエ	密 良	浅黄橙	完形	
263	093-01	土師器 皿	試掘坑 No. 1	口径 器高	11.1 2.7	ナデ・オサエ	密 良	灰 白	ほぼ 完形	
264	092-03	土師器 鍋	試掘坑 No. 7	口径	15.0	ハケ・ナデ	密 良	浅黄橙	口縁部 1/5	外面に煤付着 口縁部に3ヶ所穿孔あり
265	093-04	土師器 鍋	試掘坑 No. 4	口径 胴径	26.4 34.3	ハケ・ナデ	密 良	にぶい 橙	口縁部 1/4	胴部以下煤付着
266	092-02	土師器 鍋	試掘坑 No. 7	口径	30.0	ハケ・ナデ・オサエ	やや密 良	にぶい 黄 橙	口縁部 1/6	内外面に煤付着
267	059-01	土師器 鉢	e 13 S K79	口径 器高	36.7 9.6	ハケ・ケズリ・ナデ	やや密 良	橙	1/3	
268	058-02	土師器 甕	e 13 S K79	口径	30.3	ハケ・ケズリ・ナデ	やや密 良	灰 白	口縁部 1/3	
269	059-02	土師器 甕	e 13 S K79	口径	39.0	ハケ・ナデ	やや密 良	にぶい 黄 橙	口縁部 1/12	
270	057-01	土師器 長胴甕	e 13 S K79	口径	26.3	ハケ・ナデ	やや密 良	にぶい 黄 橙	口縁部 3/8	
271	058-01	土師器 長胴甕	e 13 S K79	口径	23.5	ハケ・ナデ	やや粗 良	浅 橙	口縁部 1/5	
272	060-01	土師器 長胴甕	e 13 S K79			ハケ・ケズリ	やや密 良	にぶい 橙	1/3	

第８表　前田地区遺物観察表



第28図　前田・町屋地区遺構平面図（1：800）

3　結語

前田地区からは、主に古墳時代前期初頭前後の墳墓群や奈良時代の土坑、鎌倉時代から室町時代までの土坑・井戸などを確認した。

この他にも、縄文土器・弥生土器も若干ながら出土しているが、ともに積極的に生活の痕跡を示すような遺構は認められなかった。古墳時代についても馬具や埴輪などが出土しているが、出土量は極めて少なく、奈良時代まではほぼ空白の時期である。平安時代の遺物の出土量も少なく、前田地区では断続的に生活が営まれていた様相が窺える。

(1)古墳時代

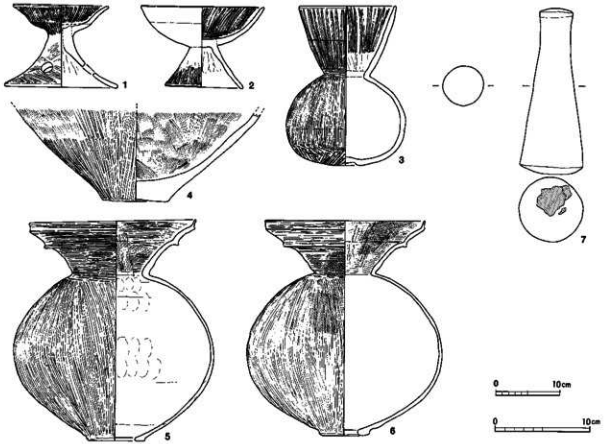
a．前田町屋墳墓群

墳墓は町屋地区のものも併せて4基を確認した。

1号墓の周溝からは、器台(1)や椀形高杯(2)、ヒサゴ壺(3)、二重口縁壺(5・6)、石杵(7)などが出土している。二重口縁壺は大型のもので、底部は焼成後に穿孔をしており、断面を研磨しているようにみえる。胎土はにぶい橙色を呈し、体部の球形化や調整の粗雑化など、2号墓のものと比べて後出する様相が窺える。6には内外面に赤彩が残る。石杵は、極めて丁寧なつくりであり、表面はなめらかである。底部には朱が付着している。

出土した土器から考えると、4号墓が欠山式中から新段階併行期と最も古く、1から3号墓は元屋敷式併行期に収まるものと考えられる。1号墓は、2号墓よりも後出し、また3号墓は球形に近い体部をもつ単口縁の壺が出土していることなどから、2号墓と1号墓の間に位置づけたい。従って、4号墓→2号墓→3号墓→1号墓の順と考えられる。

同じ時期のものとして、雲出島貫遺跡で墳墓や集落が確認されている。ここでは遠方各地の土器が出土しており、雲出川および伊勢湾を利用した交流をが窺える。また、小野江菖目遺跡や松本権現前遺跡[3]でも古墳時代前期初頭前後の古式土師器が出土しており、雲出川下流域ではいくつかの集落が存在するものと思われる。前田町屋墳墓群は、こうした集落の下流、雲出川の河口部にあり、伊勢湾への玄関口として興味深い場所に位置している。



第29図　前田町屋1号墓出土遺物（1：4＝1～4・7、1：6＝5・6）　※トーン部分：6＝赤彩、7＝朱付着

b．二重口縁壺について

二重口縁壺は、三重県下において30近い遺跡から出土している。なかでも、前田町屋墳墓群から多数出土した、頸部が逆「ハ」の字状に開くタイプのものは、概ね津市から松阪市までの中南勢地域に集中して分布する。これらはいわゆる「伊勢型二重口縁壺」[10]と呼ばれているものである。

今回は、十分な検討は行えていないが、この逆「ハ」の字状の頸部をもつ二重口縁壺について、主要な遺跡のものを例に、若干の考察を加えたい。

中鳶遺跡[11]では、口縁部と有段部に斜線列に刺突文を有するものや肩部にタテハケ・櫛描横線文・綾杉状刺突文をもつものなどが出土している。底部の穿孔はみられない。肩部に文様を有するものは、カゴメがあり、実用品と考えられる。

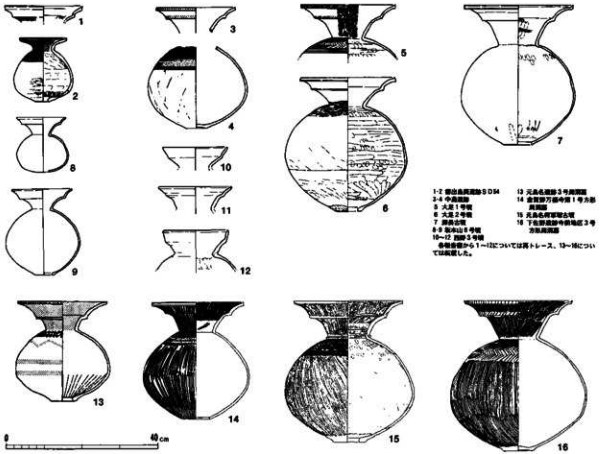
坂本山6号墳[12]より出土したものは、前田町屋2・3号墓のものとよく似た形態を示す。底部は焼成後に粗い穿孔がなされおり、ケズリによる整形はみられない。

雲出島貫遺跡では、墳墓の周溝であるＳＤ54より底部を穿孔し下膨れの体部をもつ加飾壺とともに、赤彩された二重口縁壺が出土している。出土したのは口縁部だけであるので、頸部が逆「ハ」の字状になるかどうかは不明であるが、最も古い部類のものである。他の遺構や包含層からも、これに後出する二重口縁壺も多数出土しており、口縁部に刺突文を施すものもみられる。

西野３号墳[13]出土のものは、口径や口縁形態にバリエーションがみられる。外面はナデ調整で、底部は焼成前穿孔である。

深長古墳[14]からは多量の二重口縁壺が出土している。最大径は体部中位にあり、球形に近いものが多い。調整はナデとなり、ヘラミガキはみられない。底部は焼成前穿孔である。口縁形態は若干の違いはみられるものの、概ね同じ形態を示し、口径もばらつきが少ないことから、一定の規格性が窺える。文様を施すものはみられない。

大足１号墳[15]からは、口縁部と有段部に刺突文を有し、肩部に櫛描横線文・綾杉状刺突文をもつ。２号墳出土のものは、やや球形の体部をもち、体部は横



第30図　二重口縁壺一覧（1：10）

※トーン部分は赤彩

方向にヘラミガキを行う。底部を焼成後に穿孔するが、ケズリによる整形はみられない。

以上の二重口縁壺を形態・調整により、Ⅳ期に大別した。

Ⅰ期…雲出島貫ＳＤ５４

Ⅱ期…前田町屋２・中嵩・大足１

Ⅲ期…前田町屋３・坂本山６・大足２・前田町屋１

Ⅳ期…深長・西野３

Ⅰ期は、Ⅱ期成立以前のものである。資料は少なく、島貫遺跡で口縁部が出土しているのみである。

Ⅱ期のものは、外面全体および口縁部内面に丁寧なヘラミガキを施す。ヘラミガキの方向は基本的には縦もしくは斜め方向である。口縁部・有段部に刺突文や、肩部に擬描横線文に区画された綾杉状刺突文をもつものも多い。底部は焼成後穿孔であるが、ケズリによる整形はみられない。

Ⅲ期は、形態的にはⅡ期のものと大きくは変わらないが、体部や口縁部の外面に横方向のヘラミガキを施すものが出現するなど、調整に変化がみられる。前田町屋１号墓のものは、底部を焼成後穿孔した後にケズリによる整形が行われる。

Ⅳ期は、体部の球形化が進み、調整はナデへと変化する。底部の穿孔も焼成前に行われる。深長古墳では形態の規格化が窺える一方で、西野３号墳のように大きさや口縁形態にバリエーションをもつものもみられる。

全体的な大まかな傾向をみてみたい。形態では、大型化や体部の球形化の流れがみられる。また調整も、縦・斜め方向のミガキ→横ミガキの採用→ナデの流れがみられる。底部の穿孔は、焼成後穿孔→焼成後穿孔の後ケズリ→焼成前穿孔となるが、あくまでも大きな傾向を表しているだけで、雲出島貫遺跡ＳＤ54出土の加飾壺のように、Ⅰ期の段階で焼成後穿孔後に丁寧なケズリ整形が施すものも存在する。

次に文様構成について考えたい。Ⅱ縁部や有段部に斜線列の刺突文を有するものはⅡ期に多く見られるが、口縁部に斜線列の刺突文を施すものは、Ⅱ期以前から広口壺に一般的にみられる文様であり、その系譜を中南勢地域で求めることは可能である。また、肩部に擬描横線文と綾杉状刺突文を施文する文

様構成は、弥生土器の流れを汲むもので、櫛描横線文と列点文や波状文を繰り返す文様構成から派生したものであろう。施文するものはⅢ期以降ほとんどみられないが、山城遺跡ＳＤ20からは櫛描横線文の下に綾杉状刺突文を有する二重口縁壺が出土している。横線文は１条のみで、綾杉文は区画されず、文様の退化がみられる。資料的に少ないため十分な検討は行えないが、文様を施すものは、Ⅱ期以降にはほとんど見られなくなるが、消滅するものではなく、その後も存続すると思われる。

文様構成から考えると、ともにその系譜を当地域で求めることは可能であり、これらの二重口縁壺は中南勢地域において成立したものと考えられる。その成立は、Ⅱ期の段階ですでに出現しているが、これに先行するものの存在も想定される。しかし、現在のところその資料は少なく、今後の資料の増加を待ちたい。

各時期の併行関係について、Ⅱ期は前田町屋２号墓・大足１号墳第２層の共伴する土器からみて、元屋敷式の最も古い段階に相当する。しかし、肩部に施文される文様構成は欠山式併行期の影響が強く見られることから、欠山式併行期まで遡る可能性も考えられる。Ⅳ期は山城Ⅱ式期よりも先行するものであり、Ⅲ・Ⅳ期も元屋敷式に併行する範疇内で考えられる。Ⅰ期はⅡ期に先行する段階のもので、欠山式中から新段階併行期を想定しておきたい。

群馬県出土の二重口縁については、元鳥名将軍塚出土のものなど、三重県のものと類似することがすでに指摘されているが、形態や調整、文様構成から再度検討してみたい。

元鳥名将軍塚[18]出土の二重口縁壺は、形態や肩部の文様構成などに三重県のものと強い共通性がみられる。文様的にはⅡ期に近い様相を呈するが、体部の球形化や規格化された大型のものが多数出土していること、底部をケズリによって仕上げていることなどから、むしろⅢ期に近い。頸部に突帯をもつものや波状文を有するものは三重県の二重口縁壺には見られないものである。

元鳥名遺跡３号周溝墓[19]出土のものは、調整はナデ調整で、やや粗雑なつくりである。口縁部に刺突文が施されるが、体部には赤彩による文様があり、他種の壺との融合が窺える。底部は焼成前穿孔である。倉賀野万福寺遺跡第１号方形周溝墓[20]、下佐野遺跡寺前地区３号方形周溝墓[21]出土のものは、ともにⅡ期の形態に近い様相を呈し、文様も肩部に櫛描横線文と綾杉状刺突文を施すなど、前田町屋２号墓のものと酷似する。しかし、綾杉文は横線文によって完全には区画されない。

群馬県出土のいわゆる「伊勢型二重口縁壺」については、従来の指摘通り、三重県のものと極めてよく似ている。文様構成ではⅡ期に近い様相が見受けられるが、綾杉文が完全に区画されるものは少なく、文様規格の崩れともとれる様相が窺える。さらに、形態や調整ではⅢ期的な様相を示している。これらは三重県のⅡ期のものと比べて、若干の時期差があるものと考えられる。おそらく、Ⅱ期直後からⅢ期渡る時期に相当するのではないだろうか。

頸部に突帯をもつものや肩部に波状文を施すものについては、三重県の二重口縁壺には確認されていないものもあるが、他の器種では三重県でも一般的にみられるものであり、今後の検討が必要であろう。

近年、三重県では二重口縁壺の資料が増加しており、今回はそうした資料も含めて検討を行ったが、内容は概ね田口一郎氏がすでに指摘したことを改めて確認したに留まるものである。今後は、二重口縁壺の伝播ルートも含めて更なる検討が必要である。

(2)古代

遺構は僅かしか確認できなかったものの、前田地区からは奈良時代の土器が多く出土している。暗文を施す土器が多く出土していることや下記のような墨書土器が存在することを考えると、調査区周辺には奈良時代の集落か公的施設の存在が想定される。

a．墨書土器について

溝ＳＤ61と包含層からは同一筆者のものと思われる墨書土器(45・170)が出土している。どちらも旁は「宅」であるが、偏はよくわからない。字体は極めて類似しており、同一文字の可能性が高いが、170は偏の部分が欠損しており、必ずしも同一文字は言い切れない。45は「毗」の可能性も考えられる[22]。これらの墨書は、かなり文字を書き慣れた筆者によるものと推察される。

b．志摩式製塩土器について

志摩式製塩土器は薄手のものが、８世紀後半に成立するとされている。ＳＫ21で共伴した須恵器杯身は８世紀の中頃から後半と考えられるが、志摩式製塩土器はやや厚手化しており、８世紀後半まで遡るようなものとは考えられない。須恵器は僅かに１点のみであるので、これだけで判断することはできないが、志摩式製塩土器の年代観について一石を投じるものであろう。また、前田地区では製塩土器が小片のものを含め200点程出土しており、近隣での塩の生産が想定される。

(3)中世

中世の遺物は、山茶椀を主体とする13世紀前後のもの と、土師器の皿や鍋を主体とする15世紀代のものに別 れる。住居跡は確認することができなかったが、井戸や 多くの土器が確認されていることから、集落の一端であ ったことが窺える。今回の調査では、多くの遺構から15 世紀代の鍋と13世紀前後の山茶椀が共伴して出土した。 これは、15世紀代に盛んに掘削が行われた証拠であり、 活発な生活の痕跡が窺える。しかし、16世紀以降の遺物 はほとんど無く、15世紀代に廃絶したものと考えられる。

(4)今後の課題

前田町屋墳墓群は、現在４基が確認されているが、調査結果から、調査区の東西に広がることは確実であり、今後の調査が期待される。さらに墳墓になりうるような形態の遺構も見受けられるが、これらの遺構からはほとんど遺物が出土していないか、他の時期のものが大半を占めるため、今のところ墳墓と言い切ることはできない。

古代においては、墨書土器や約200点に及ぶ志摩式製塩土器の存在など、前田町屋遺跡の位置づけが課題となる。志摩式製塩土器の年代については、再考の必要があろう。

中世では、土師器鍋類は南伊勢系のもので占められており、対岸の雲出島貫遺跡との違いが著しい。[21] こうした違いが、雲出川を境とした流通圏の違いを示すものなのか、それとも集落の性格によるものなのか、その解明も今後の課題である。

註

(1)前田町屋１～４号墓は、方形周溝墓の伝統を踏襲するものであるが、１号墓および２号墓からは底部を穿孔した壺や赤彩されたものが出土し、明確な区画が存在するなど、古墳としての性格も窺える。方形周溝墓から古墳への過渡期のものと考えられるため、ここではとりあえず「墳墓」と呼称する。

(2)伊藤裕偉「近世以降の陶器井戸枠について」『安濃津』三重県埋蔵文化財センター　1997

(3)雲出島貫遺跡でも同様の土器が出土している。

(4)ここでいう「欠山式」・「元城型式」は山田猛氏の区分による。（山田猛『山城・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1994）

(5)西村美幸「伊勢湾西岸の製塩土器」『製塩土器の諸問題』塩の会シンポジウム実行委員会　1997

(6)南伊勢系の鍋については、以下による。

a 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mehistory』vol. 1　1990

b 伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」『鍋と釜そのデザイン』第４回考古学フォーラム　1996

(7)南伊勢系の土師器については、以下による。

a 伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1990

b 伊藤裕偉『岩出遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1996

(8)藤澤良祐「山茶椀研究の現状と課題」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター　1994

(9)平成10年度に三雲町教育委員会が発掘調査を行っている。

(10)田口一郎「貝遺物の検討」『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会　1981

(11)萱室康光『中鳶遺跡発掘調査報告』津市教育委員会　1977

(12)小玉道明ほか『坂本山古墳群・坂本山中世墓群』津市教育委員会　1970

(13)伊藤裕偉「Ⅳ古墳時代前期における土器製作技法の検討」『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会　1991

(14)増田安生「Ⅴ．松阪市深長町深長古墳」『昭和61年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』三重県教育委員会　1989

(15)小林秀「７．大足遺跡」『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター　1990

(16)田口一郎ほか『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会　1981

(17)五十嵐信ほか『元島名遺跡』高崎市教育委員会　1979

(18)大賀健ほか『倉賀野力福寺遺跡』高崎市倉賀野万福寺遺跡調査会　1983

(19)飯塚卓二ほか『下佐野遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団　1989

(20)墨書土器については、柴原永進男氏・高島英之氏の御教示を頂いた。高島氏は45の土器の墨書について、偏を「肉」と判読し、「月」（にくづき）と同様のもので、「宅」の異体字であるとされた。

(21)伊藤裕偉・川崎志乃「Ⅴ調査のまとめと展望」『鳴抜　第１次調査』三重県埋蔵文化財センター　1998

Ⅳ　大明神地区の調査成果

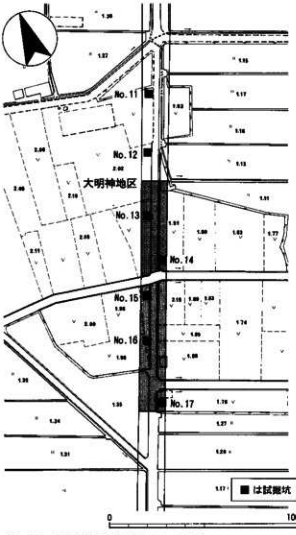
1　層位と遺構

(1)層位

前田地区の南300mに位置する。調査区は微高地で、東側から南側にかけての周辺地域は一段低い。

調査区は中央を東西にはしる道路によって分断されるため、北地区と南地区に分けて調査を行った。

層序は基本的に、現地表上面から10cm程耕作土が堆積し、表土下10～30cmに褐色砂質シルト層、表土下30cmでにぶい黄褐色砂質シルトの包含層を検出した。表土下70cmで明黄褐色砂質土の遺構検出面を確認した。検出面は、前田地区同様細かい砂質土であった。南地区では、さらに遺構検出から80cmほど下層調査を行い、灰黄色～暗灰黄色砂質土層を３層確認したが、いずれも自然堆積層であった。



第31図　調査区位置図（１：2,000）

(2)遺構

弥生時代から中世までの遺構が確認されている。詳しくは第９表遺構一覧表を参照されたい。

a．弥生時代

溝ＳＤ３　北地区を東西にはしる溝で、深さ0.２mと浅い。出土遺物は少ないが、弥生土器の壺や蓋が出土している。

溝ＳＤ12　南地区を南北にはしる溝で、幅２m、深さ0.２mを測る。遺物出土は少ないため、弥生時代であろうと考えられるが、詳しい時期は決定できない。

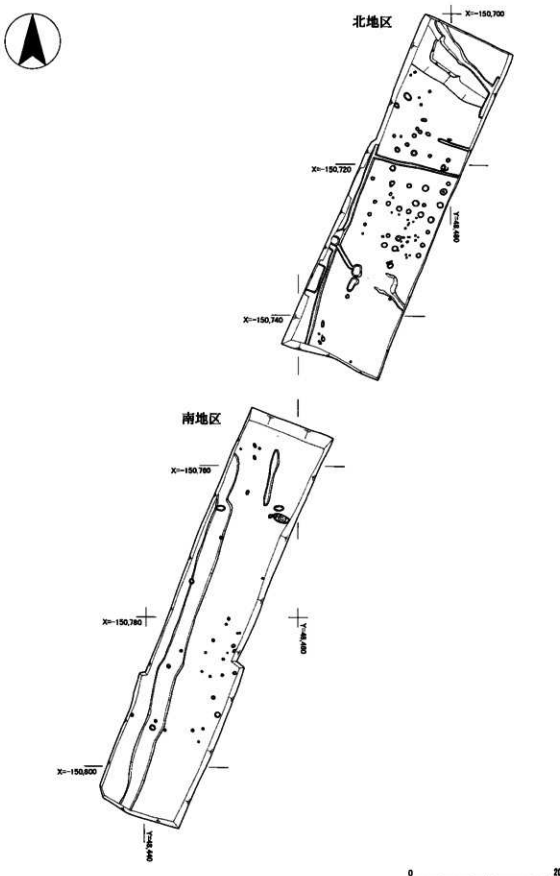
b．古代

竪穴住居ＳＨ２　北地区南西端から検出された遺構で一辺3.７mの方形を呈すると思われるが、大部分は調査区外に展開する。東側に幅110cm程の竈をもち、焼土が確認された。南東隅には貯蔵穴がある。土師器の杯や長胴甕、土錘などが出土している。

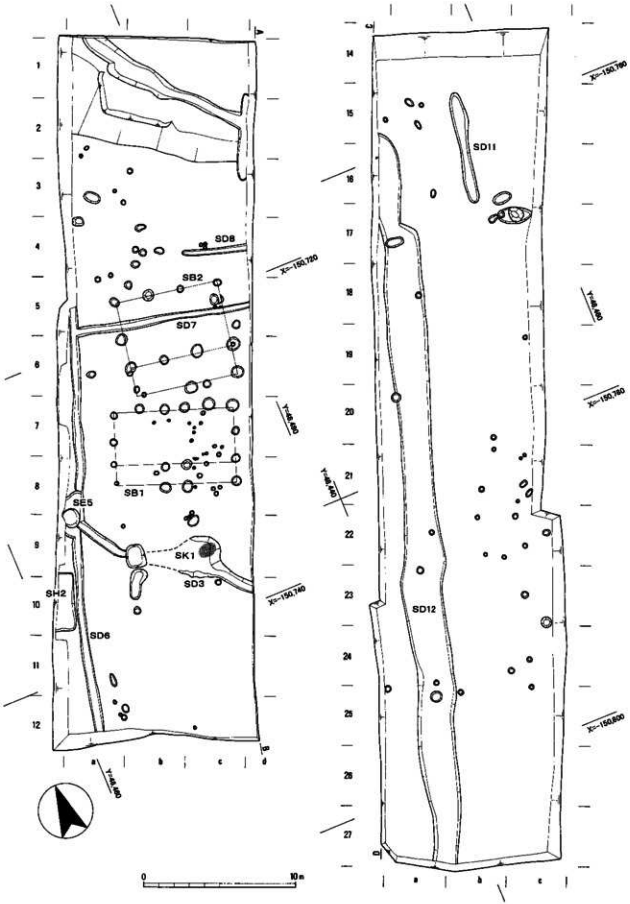
掘立柱建物ＳＢ１　北地区のほぼ中央部に位置する建物で、梁行３間×桁行５間の南面庇建物である。梁行5.２m×桁行８mで、柱間は梁行・桁行ともに約1.６mである。棟方向はＮ－21°－Ｅ。出土遺物は土師器片が１点出土したのみで時期は決定できないが、おそらくはＳＢ２に近い時期のものと考えられる。ただし、ＳＢ２とは近接しているため併存していたとは考えられない。

掘立柱建物ＳＢ２　ＳＢ１のすぐ北にあり、梁行３間×桁行３間の南面庇建物である。梁行６m×桁行７mで、柱間は梁行約2.1m、桁行約2.3mである。棟方向はＮ－10°－Ｅ。柱穴より土師器や須恵器が出土しているが、いずれも小片である。奈良時代に収まる建物であろう。

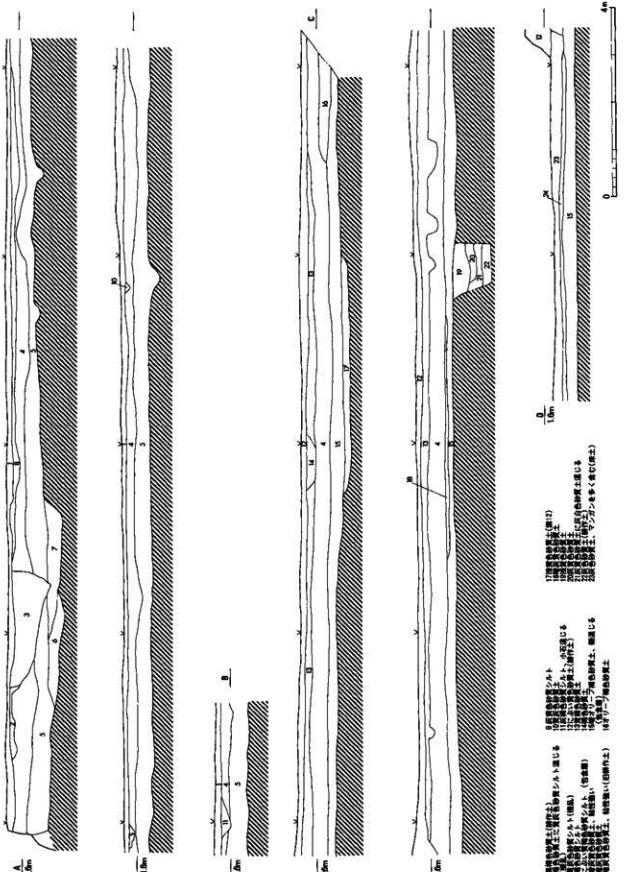
溝ＳＤ６～８　ＳＤ６は北地区西端を南北にはしる溝で幅0.３m、深さ2mを測る。ＳＤ７とＳＤ８は北地区の北半を東西に平行にはしる溝で、ともに幅0.４m、深さ0.15mを測る。これらの溝からは出土遺物が無く、時期は不明である。しかし、ＳＤ６がＳＢ１と方向を同じくするものか、もしくはＤ７がＳＢ２の排水施設であることも考えられ、これらの



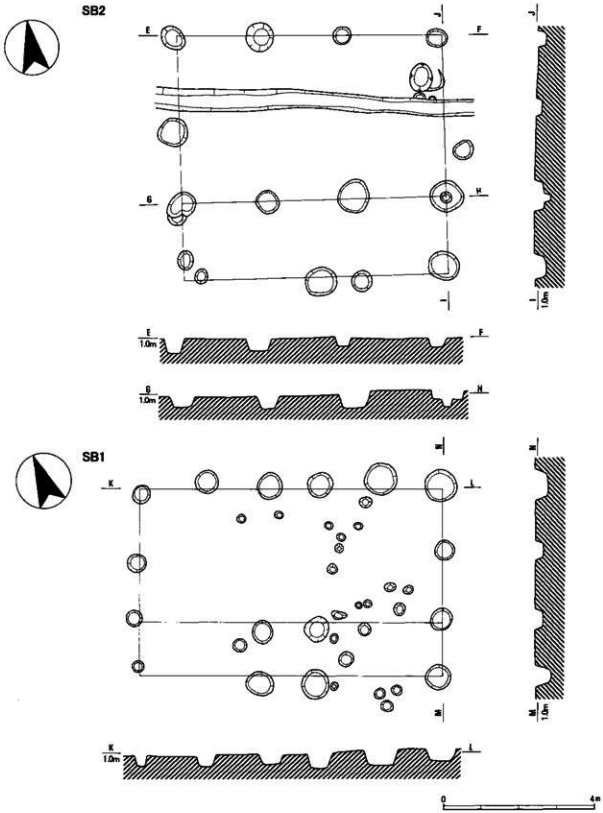
第32図　調査区全体図（1：500）



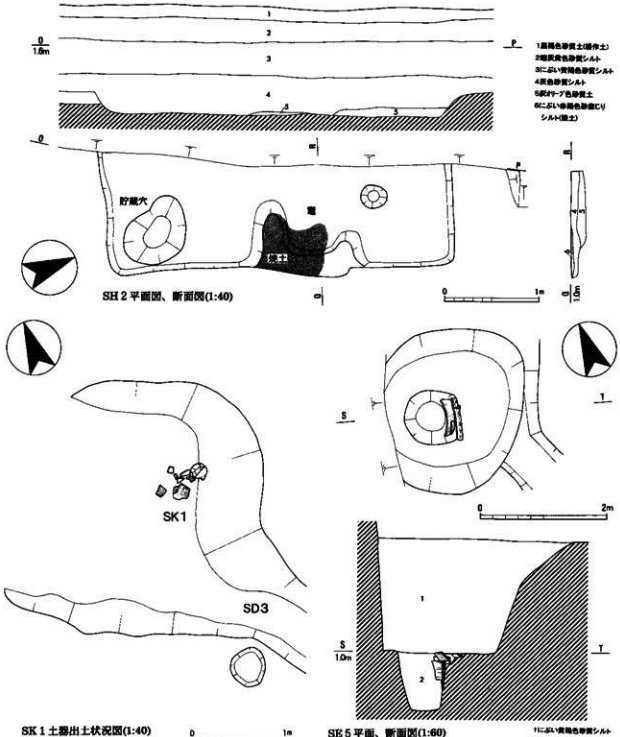
第33図　調査区遺構平面図（1：250）



第34図　調査区土層断面図（1：80）



第35図　ＳＢ１・ＳＢ２平面図、断面図（１：100）



第36図　ＳＨ２・ＳＫ１・ＳＥ５平面図、断面図

溝はＳＢ１・２に近い時期のものと思われる。また、ＳＤ６とＳＤ７は若干斜交するものの、直角に近い角度で交わっており、ＳＤ７とＳＤ８は並行していることから、道路の側溝である可能性も考えられる。

土坑ＳＫ１　北地区南東部の遺構で、ＳＤ３の埋土と区別できなかったため、遺構の形状は不明。土師器皿・甕、須恵器横瓶などが出土している。

ｃ．中世

井戸ＳＥ５　北地区西端に位置する。掘形は、直径1.3m、深さ1.4mを測る。底部には曲物の一部が残っていた。埋土より山茶椀や白磁などが出土している。

遺構略号	種　別	地区	グリッド	時　期	備　考
ＳＫ１	土坑	北	ｃ９	奈良時代	
ＳＨ２	竪穴住居	北	ａ10	奈良時代前期	東竈、貯蔵穴
ＳＤ３	溝	北	ａ９～ｄ10	弥生時代	
ＳＥ５	井戸	北	ａ９	鎌倉時代初頭	
ＳＤ６	溝	北	ａ５～ａ12	？	
ＳＤ７	溝	北	ａ５～ｃ５	？	
ＳＤ８	溝	北	ｂ４～ｃ４	？	
ＳＤ11	溝	南	ｂ15～ｂ17	弥生時代？	
ＳＤ12	溝	南	ａ15～ｂ27	弥生時代	
ＳＢ１	掘立柱建物	北	ａ７～ｃ８	奈良時代	３間×５間、南面庇建物
ＳＢ２	掘立柱建物	北	ａ５～ｃ６	奈良時代	３間×３間、南面庇建物

第９表　大明神地区遺構一覧表

２　遺物

大明神地区では縄文時代から中世までの遺物が出土している。以下、主な遺物について遺構別に記述するが、それ以外のものについては第10表遺物観察表を参照されたい。

(1)縄文時代

包含層・下層出土土器(19・26)　19は突帯上に二枚貝による押し引き条痕が施されるもので、縄文晩期末の深鉢である。馬見塚式と考えられる。26は下層から出土したもので、緩やかな波状口縁をもつものである。窓状区画内には半裁竹管状工具による刺突があり、横状突起部には円形押圧がみられる。横状突起部の下には２条の沈線が垂下している。縄文中期後半から後期初頭頃の深鉢と考えられる。

(2)弥生時代

ＳＤ12出土土器(１・２)　１は甕の底部と考えられる。外面はハケ調整が行われる。底部には木の葉痕がみられる。２も底部であると考えられるが、器形はわからない。ともに小片であるために詳しい時期は不明である。

ＳＤ３出土土器（３・４）　３は外面にヘラミガキが施される。壺になるものと考えられる。４は外面にミガキ、内面にハケがみられるもので、後期の甕と思われる。

包含層・下層出土土器(20～22、27～31)　28は甕の口縁部で、外面に５条のヘラ描沈線がみられる。29は壺の肩部であり、４条以上の沈線がみられる。ともに前期新相と考えられる。20・30は受口状口縁甕。20は口縁部に押し引きの刺突文がみられ、頸部から肩部には、粗いハケ調整を行った後に櫛描文と刺突文が施される。30もほぼ同様の調整がみられ、口縁部外面には煤が付着する。ともに後期前半のもの。22・31は有段口縁をもつ高杯で後期後半のもの。２１は欠山式併行期の高杯。杯部の稜線以下から脚部との境までは一部ハケ調整が行われる。

(3)古代

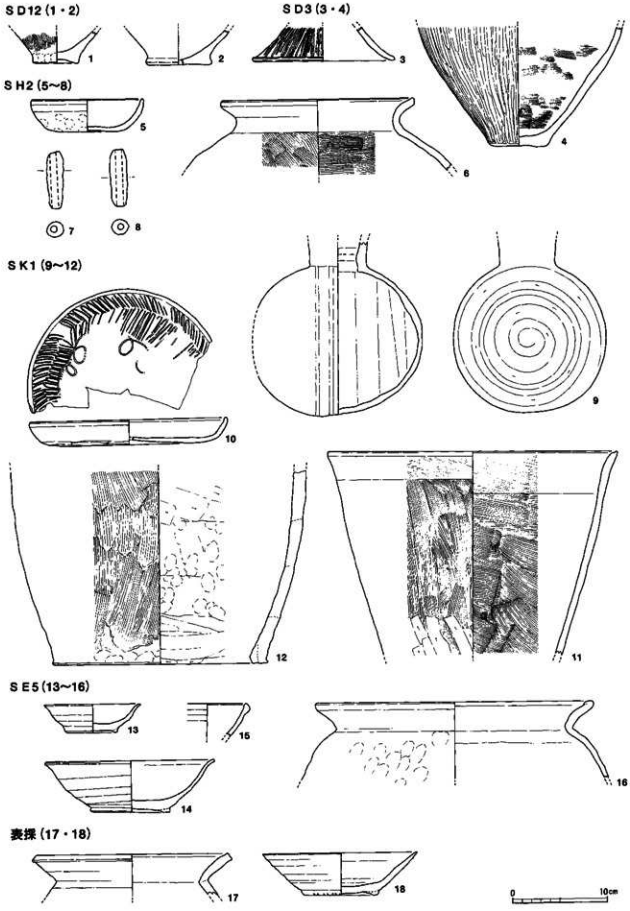
ＳＨ２出土遺物(５～８)　５は土師器椀で、外面には煤が付着している。６は土師器長胴甕である。ともに奈良時代前期に収まるものと考えられる。７・８は土錘。

ＳＫ１出土遺物(９～12)　９は須恵器横瓶。やや横長の球形に近い体部をもつ。「フラスコ形」と呼ばれるものである。10は土師器皿。外面にはミガキ調整が行われるが、やや粗い。内面には螺旋状と放射状の暗文がみられる。また、内面全面に煤が付着している。11・12は甑で、11は口縁部、12底部である。ともに外面に煤が付着する。これらの土器は奈良時代前期に収まるものと考えられる。

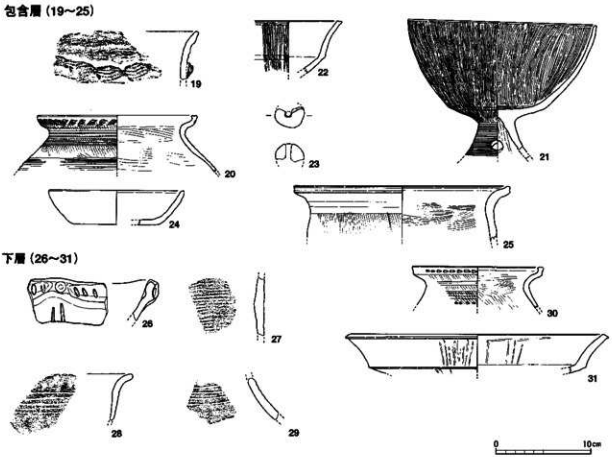
包含層出土土器(24・25)　24は土師器椀、25は土師器甕である。ともに奈良時代のもの。

(4)中世

ＳＥ５出土土器(13～16)　13・14は山茶椀。14は知多半島産のもので瀧澤編年の第５型式[11]に相当する。15は白磁椀で、口縁部が玉縁状になるもので白磁椀Ⅳ類にあたる。[12] 16は土師器甕で、体部や口縁部の外面にオサエがみられるなど調整は粗い。概ね鎌倉時代初頭のものと考えられる。



第37図　遺物実測図（1：4）



第38図　遺物実測図（1：4）

3　結語

大明神地区では縄文時代から中世にかけての遺物が出土しているが、中心となるのは奈良時代である。２棟の掘立柱建物は南面庇をもつものであり、一般の建物というよりは、公的施設か有力氏族の建物であると考えたい。また、ＳＤ６～８が道路遺構の側溝の可能性もあり、ＳＢ１と併存することも考えられる。前田地区で奈良時代の墨書土器も出土していることや、このあたりに「一志駅」の存在が想定されているをあわせて考えると、この掘立柱建物が「一志駅」の関連施設であることも想定される。今後の周辺の調査に期待したい。

註

(1)藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号
　三重県埋蔵文化財センター　1994

(2)森田勉「太宰府出土の輸入貿易陶磁器について」『九州歴史資料
　館研究論集』４集　九州歴史資料館　1978

番号	登録番号	種別器形	グリッド遺構・層位	計測値(cm)		調整	胎土構成	色調	残存	備考
1	004-05	弥生土器 壺	a27 SD12	底径	4.8	ハケ・ナデ・オサエ	やや粗 良	にぶい 橙	底部 完形	底部に木の葉痕あり
2	006-04	弥生土器?	b26 SD12	底径	6.4	外面ケズリ?・ナデ	粗 良	にぶい 橙	底部 1/2	
3	006-06	弥生土器 甕?	c10 SD3	口径	14.4	ミガキ・ナデ	粗 良	にぶい 黄 橙	口縁部 1/6	
4	001-02	弥生土器 壺	c10 SD3	底径	5.6	ミガキ・ハケ・ナデ	やや粗 良	にぶい 橙	1/4	
5	002-03	土師器 椀	a10 SH2	口径 底高	11.8 3.4	ナデ・オサエ 内面工具ナデ	やや密 良	浅黄橙	1/3	外面に煤付着
6	002-01	十師器 長胴甕	a10 SH2	口径	20.2	ハケ・ナデ	粗 良	明黄褐	口縁部 1/5	
7	007-06	土錘	a10 SH2	最大長 最大幅	6.1 1.8		やや密 良	にぶい 黄 橙	完形	穴径0.7cm 重量10.35g
8	007-07	土錘	a10 SH2	最大長 最大幅	6.1 1.8		やや密 良	暗 褐	完形	穴径0.8cm 重量17.24g
9	003-01	須恵器 横瓶	c9 SK1			外面ケズリ・頸部ナデ 内面ナデ	やや密 良	灰 黄	3/5	フラスコ形横瓶
10	001-03	土師器 皿	c9 SK1	口径 器高	20.8 2.6	ナデ・底部ミガキ 内面螺旋状・放射状暗文	やや密 良	橙	1/2	
11	009-01	土師器	c9 SK1	口径	30.6	ハケ・ケズリ・ナデ	やや粗 良	にぶい 黄 橙	口縁部 1/4	
12	008-01	土師器 甕	c9 SK1	底径	22.6	ハケ・ナデ・オサエ 内面一部ケズリ・底部圧痕あり	粗 良	浅黄橙	底部 1/4	
13	004-01	陶器 山茶椀	a9 SE5	口径 器高	10.1 3.0	ナデ 底部糸切り・貼付高台	やや密 良	灰 白	1/2	高台の貼付粗く、楕円形を呈する
14	001-01	陶器 山茶椀	a9 SE5	口径 器高	17.8 5.5	ナデ 底部糸切り・貼付高台	粗 良	にぶい 黄 橙	9/10	短多平品産 高台径8.5cm
15	005-02	白磁 椀	a9 SE5			ナデ・施釉	密 良	灰 白	小片	
16	005-01	土師器 壺	a9 SE5	口径	29.2	ナデ・オサエ	粗 良	灰 白	口縁部 1/6	
17	002-02	土師器 壺	表採	口径	20.4	ナデ	やや粗 良	浅黄橙	口縁部 1/4	
18	004-03	陶器 山茶椀	表採	口径 器高	16.4 4.5	ナデ 貼付高台	やや密 良	灰 白	2/5	高台に梅がい痕あり
19	007-01	縄文土器 深鉢	c10 包含層			ナデ 貼付突帯・具殻押圧痕	粗 良	赤 橙	小片	馬見塚式
20	006-03	弥生土器 壺	c9 包含層	口径	16.8	櫛描横線文・ハケ・ナデ 口縁部刺突文	やや粗 良	浅黄橙	口縁部 1/6	
21	004-04	土師器 高杯	c23 包含層	口径	19.9	ミガキ・櫛描横線文・ハケ	やや密 良	にぶい 橙	口縁部 1/3	四方スカシ
22	005-03	土師器 高杯	a24 包含層			ミガキ	やや密 良	橙	小片	
23	007-08	土錘	a11 包含層	底径 穴径	3.0 0.7		やや密 良	橙	1/2	
24	004-02	土師器 椀	a3 包含層	口径 器高	14.3 3.6	ナデ	密 良	橙	1/5	
25	005-02	土師器 壺	a4 包含層	口径	22.8	ハケ・ナデ	やや密 良	にぶい 黄 橙	口縁部 1/5	
26	007-02	縄文土器	c10 下層			波状口縁・突帯 刺突文・沈線	粗 良	淡 黄	小片	
27	007-04	弥生土器	c8 下層			桑痕文・ナデ	粗 良	にぶい 橙	小片	
28	007-03	弥生土器 壺	b17 下層			ナデ・沈線	粗 良	赤 橙	小片	
29	007-05	弥生土器 壺	b20 下層			ナデ・沈線	やや粗 良	にぶい 橙	小片	
30	006-05	弥生土器 壺	b23 下層	口径	13.8	櫛描横線文・ハケ・ナデ 口縁部・体部刺突文	やや粗 良	にぶい 黄 橙	口縁部 1/7	
31	006-01	弥生土器 高杯	b21 下層	口径	28.0	ミガキ・ナデ	やや粗 良	浅黄橙	口縁部 1/8	

第10表　大明神地区遺物観察表

南半部最終遺構面

北半部包含層上面

北半部最終遺構面

4号墓

2・3号墓

SD55　南部土器出土状況

SD55　二重口縁壺出土状況

写真1　前田地区遺構

ＳＤ63　南部土器出土状況

ＳＫ12　土器出土状況

ＳＫ21　土器出土状況

ＳＫ22　土器出土状況

ＳＫ27　土器出土状況

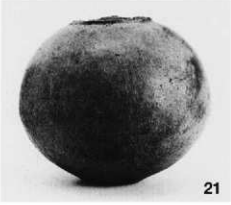
ＳＫ50　土器出土状況

ＳＥ48

ＳＥ58　立ち割り状況

写真２　前田地区遺構

写真3　前田地区出土遺物（ＳＤ55）



S D 63 (21～24)

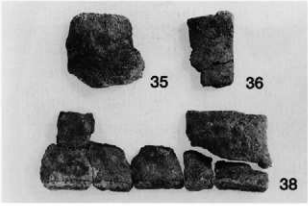
S K 53

S D 75 (32)

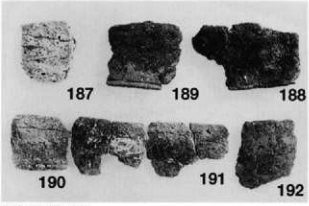
S K 12 (1・2)

馬 具

写真4　前田地区出土遺物

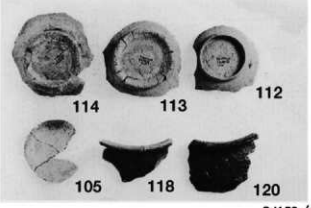


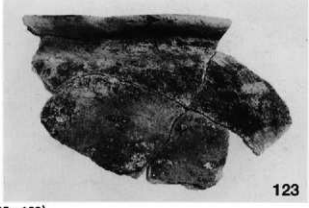
ＳＫ21（33～36）・ＳＫ22（38）



志摩式製塩土器

ＳＫ79





ＳＫ50（105～123）

墨書土器（ＳＤ61）

墨書土器

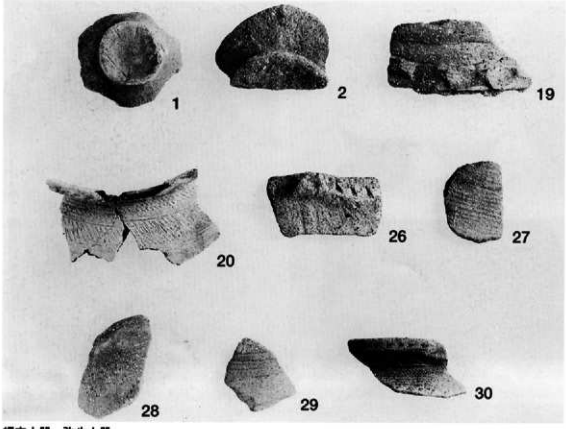
写真５　前田地区出土遺物

北地区

南地区

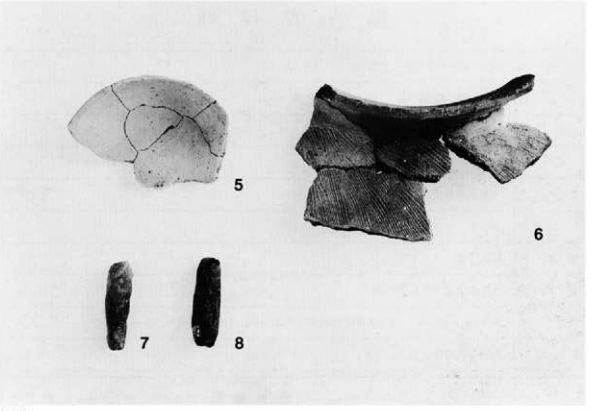
SB1

SB2

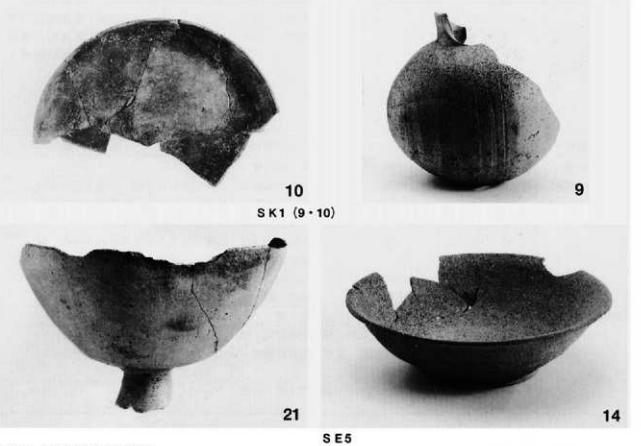


縄文土器・弥生土器

写真6　大明神地区遺構・出土遺物



SH2



SK1（9・10）

SE5

写真7　大明神地区出土遺物

報告書抄録

ふりがな	まえだまちやいせきだいにじちょうさ
書名	前田町屋遺跡　第２次調査
副書名	－前田地区・大明神地区－
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１７５
編集者名	新名　強
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　☎0596－52－1732
発行年月日	西暦1999年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
まえだまちやいせき 前田町屋遺跡	みえけんいちしぐん 三重県一志郡 みくもちょうほしあいあざ 三雲町星合字 まえだ・だいみょうじん 前田・大明神	24407	9	34度 38分 24秒	136度 31分 47秒	1997.10.12 ～ 1998.2.13	前田地区 1500㎡ 大明神地区 1250㎡	平成９年度一般地方道三雲香良洲大橋国補橋梁整備工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事
前田町屋遺跡 前田地区	墳墓群 集落跡	弥生時代	土坑	壺・蓋付甕	
		古墳時代	墳墓　３基	古式土師器高杯・壺・二重口縁壺、鉄鏃	３基の墳墓を確認。周溝より二重口縁壺が多数出土。鉄鏃を納めた壺も出土。
		古代	土坑	志摩式製塩土器 須恵器杯身	志摩式製塩土器と須恵器杯身が一括で出土。墨書土器も出土。
		中世	井戸　６基 土坑	山茶椀、土師器皿・鍋	
前田町屋遺跡 大明神地区	集落跡	弥生時代	溝	壺・甕	
		古代	掘立柱建物２棟 竪穴住居　１棟 土坑	土師器皿・甑 須恵器横瓶	南面庇付掘立柱建物２棟確認。
		中世	井戸　１基	山茶椀・白磁	

平成11(1999)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年8月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告175

前田町屋遺跡

第2次調査

－前田地区・大明神地区－

1999・3

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　文化印刷有限会社